

56
163



始



H210J-6

婦人衛生 妊娠十月と其手当目次

女子の生殖機關

一	總論	一
二	陰阜	三
三	大陰唇	三
四	小陰唇	四
五	陰核	五
六	膺	五
七	處女膜	七
八	バルトリン腺及び諸他分泌類	七

九 卵巢	二八
一〇 輸卵管	一〇
一一 子宮	三

婦人の月經

一 月經に就て	一五
二 月經不順	一六
三 月經と全身との關係	一八
四 月經の期間と分量	一九
五 月經の開始及閉止	二〇
六 月經閉止と生活との關係	二四
七 都鄙と經閉	二七

結婚と妊娠の關係

八 月經存續年間及び月經中止	二九
九 月經不順	三〇
一〇 月經時の攝生	三六
一 結婚と妊娠	四三
二 結婚の種類	四四
三 結婚と年齢	四六
四 結婚と體質	四六
五 結婚と性質	四八
六 結婚と系統	五〇
七 血族結婚の弊害	五二

八 異人種との結婚…………… 四

女子關係不能

- 一 不能の種類…………… 五
- 二 膾性關係不能症…………… 五
- 三 子宮性關係不能症…………… 五
- 四 性慾缺乏症…………… 五
- 五 幼年者房事の害…………… 五
- 六 老年者の害…………… 五

妊娠認定法

一 妊娠の特徴…………… 五

妊娠中の攝生

- 二 妊娠と乳房…………… 六
- 三 妊娠と腹部…………… 六
- 四 妊娠と顔面…………… 六
- 五 妊娠と便尿…………… 六
- 六 妊娠と惡阻…………… 六
- 七 妊娠と精神の異常…………… 六
- 八 妊娠と注意…………… 六
- 一 妊婦の精神安靜…………… 六
- 二 妊婦の居室…………… 六
- 三 妊婦の衣服…………… 六

四	妊婦の腹帯	六七
五	妊婦の起居動作	六七
六	妊婦の睡眠	六八
七	妊婦の頭髮	六九
八	妊婦の入浴	六九
九	妊婦の腰湯	七〇
一〇	妊婦の便通	七〇
一一	妊婦の食物	七一
一二	妊婦の乳房	七一
一三	妊婦の浮腫	七二

子の無き原因

一	女子の不妊症	七三
二	子宮性不妊	七四
三	卵巢不全と不妊	七四
四	淋病と不妊	七五
五	梅毒と不妊	七六
六	男女不妊の原因	七七
七	必ず妊娠する法	八一

分娩時の心得

一	分娩の種類	八二
二	閉経と妊娠	八三
三	分娩機轉	八四

四	分娩時の苦痛	八五
五	坐産と臥産	八六
六	分娩時の負傷	八七
七	分娩後の子宮	八七
八	妊娠各月の胎兒	八八
九	完全無缺の生兒	九四
一〇	双胎	九四
一一	妊娠中母體各部及全身變化	九五
一二	お産の日を知る法	九六

妊娠中種々の心得

一	妊娠の定義	一〇五
---	-------	-----

二	成熟胎兒及兩性に分る、原因	一〇八
三	子宮胎兒の位置、體向及姿勢	一〇九
四	數胎妊娠	一一一
五	初妊及經妊の區別	一一二
六	胎兒の生死を知る法	一一三

産褥中の心得

一	産褥六週間	一二四
二	産褥中の惡露	一二四
三	産褥熱の注意	一二五
四	分娩後の手當て	一二六
五	産褥中の攝生	一二七

六	産褥中の兩便……………	二八
七	産褥中の入浴……………	二九
八	産褥中の衣服……………	二九
九	産褥中の居室……………	三〇
一〇	産褥中の腹帯……………	三〇
一一	産褥中局部の清潔……………	三一
一二	乳房の清潔……………	三一
一三	産婦と授乳……………	三一
一四	授乳の度数……………	三一
一五	産褥中の食物……………	三一

産兒の手當と其心得

一	産兒臍帶の手當……………	三四
二	産兒の寢せ方……………	三五
三	胎便の處置……………	二六
四	産兒と便通……………	二六
五	産兒の食慾……………	二七
六	乳授と乳房の清潔……………	二七
七	乳の検査……………	二九
八	乳母の年齢……………	二九
九	産兒の營養……………	三〇
一〇	産兒の胃腸……………	三〇

小兒の罹る傳染病の注意

一	麻疹	一三三
二	風疹(かさほろ)	一三五
三	水痘	一三五
四	猩紅熱	一三六
五	實扶的里亞	一三六
六	疫痢	一四四
七	小兒赤痢	一四四
八	百日咳	一四七

生殖衛生

一	青年色慾の害を戒む	一五〇
二	男子亂淫の害	一六〇

三	女子亂淫の害	一六二
四	色情早期發動の原因	一六三
五	男女自瀆の害	一六五

婦人病の注意

一	婦人病とは何か	一六七
二	陰唇及び陰核の異常	一六九
三	處女膜の異常	一七〇
四	膈の異狀	一七〇
五	子宮の矮小	一七一
六	子宮口の狹小	一七一
七	輸卵管の異常	一七二

八	卵巢の異常	一七三
九	陰門瘙痒症	一七三
一〇	陰門炎	一七三
一一	白帶下(膿漏、膿加答兒)	一七四
一二	婦人尿道炎及び狹窄	一七四
一三	婦人膀胱加答兒	一七五
一四	子宮外膜炎	一七七
一五	子宮内膜炎	一七九
一六	子宮炎	一八〇
一七	子宮筋腫	一八〇
一八	子宮癌腫	一八一
一九	輸卵管炎	一八二

二〇	卵巢癰腫	一八三
二一	卵巢炎	一八四
二二	婦人の淋病	一八四
婦人の心得置くべき微毒		
一	婦人ニ微毒	一八七
二	微毒の起因	一八八
三	微毒の原因	一九〇
四	病毒の全身に列る順序	一九一
五	微毒の傳染経路	一九三
六	微毒の経過	一九九

微毒の遺傳及傳染

- 一 微毒の症候.....101
- 二 第一期微毒.....101
- 三 第二期微毒.....111
- 四 外皮に發生する微毒疹.....115
- 五 粘膜に發生する微毒疹.....113
- 六 毛髮及び爪.....113
- 七 第三期微毒.....114
- 八 症狀.....116
- 九 第四期微毒.....116
- 一〇 遺傳微毒.....120
- 一一 微毒の遺傳.....131

- 一二 遺傳微毒の徵候.....133
- 一三 悪性微毒.....137
- 一四 微毒免疫及び再感染.....137
- 一五 各人の微毒感染性の良否.....139
- 一六 微毒傳染力の持續期.....143
- 一七 微毒の豫防法.....145
- 一八 微毒の豫後.....147
- 一九 微毒治療に就て.....148
- 二〇 微毒と生殖作用.....151
- 二一 微毒と妊娠.....155

妊娠十月と其手當目次終

婦人衛生 妊娠十月と其の手当

附 嫁入前後の心得

ドクトル
メヂチーネ

長濱

繁著



女子の生殖機關

總論

女子の生殖器官は其構造、形状、機能等は著しく男子生殖器官と異なり、殆ど体内に在り、即ち内生殖器官にして又之れを交接に當る交接器及び蕃殖を司る蕃殖器

女子の生殖機關

妊娠十ヶ月

とに分ち類別すれば左の如くである。

甲、交接器

- 一、陰阜 春氣發動期になれば陰毛生じ陰門を保護す。
- 二、大陰唇 陰阜の下部にありて大なる皺襞である。
- 三、小陰唇 大陰唇の内側にあり小皺襞である。
- 四、陰核 小陰唇の上部にある小なる突起である。
- 五、膺 小陰唇の間にある孔、胎児の出る道である。
- 乙、蕃殖器
- 六、卵巢 卵珠を造る所である。
- 七、輸卵管 卵珠を子宮に送る管である。
- 八、子宮 胎児を十ヶ月間養育する所である。
- 九、乳房 嬰兒に乳汁を與ふる器管である。

二 陰阜

男子陰阜と同位置にあり即ち耻骨縫際の前において外皮より成る。妙齡期となれば皮下脂肪層は著しく發達して隆起し陰毛を生ず。而して後下方に向ひて大陰唇に移り行くのである。

三 大陰唇

大陰唇は陰阜の後ろ下方にありて、左右二個の膨滿せる皮膚皺襞より成り、一

女子の生殖機關

の裂溝状の空隙をなす、是れ腔口である。

大陰唇は皮膚の延長したる隆起にして、外面は陰阜と同じく陰毛を生ず。皮下に厚き脂肪層あるを以て頗る弾力に富み、内面は粘膜にして種々の分泌腺多く、酸性の臭氣ある粘液を分泌するのである。

四 小陰唇

大陰唇の内側に尚ほ左右二個の粘膜皺裂があつて陰核を連続して居る。是れを小陰唇と云ふのである。その形は大陰唇と異なり、薄くして瓣状を呈し、左右より腔前庭を圍み、外方は大陰唇と連続す。小陰唇は知覺神經に富み感觸鋭敏である。

五 陰核

陰核は左右大陰唇前連合の下際にあり、小圓體突起にして、其質稍々硬く大豆の如くである。

陰核の構造及び機能共に男子陰莖と同じく、海綿様の組織より成り勃起性を有し、且つ神經に富むを以て感觸鋭敏である。海綿體中には數多の血管ありて此に血液の充實して勃起するものである。

六 腔

腔は陰門下方より漸次上に向ひ子宮に達するまでの囊管である。其入口を腔

女子の生殖機關

妊娠十ヶ月

口と云ふ、終端に子宮頸がある。膣は恰も袋の如く周囲は甚だ堅牢なる厚き筋を周らし、著しく伸縮する性を有つて居る。深さ大凡四寸位にして、直径一寸二分五厘より二寸五分に及ぶ。

膣は曲線に迂廻し、其の凹面は前方にありて膀胱に接し、凸面は後方に在りて直腸に達して居る。

膣の直径は全長を通じて一様ではなくして入口狭く奥の方は廣く全體に粘膜にて覆はれて居る。粘液膜の下は厚き結締組織にして、其下に又膣海綿體と名くる筋がある。此の筋は陰莖海綿體と同じく勃起性を有し膣道を膨脹收縮せしむる。處女膜及びバルトリン氏腺は膣の入り口に在るのである。

七 處女膜

處女の膣口を一部閉塞する所の膜にして、春氣發動期に至れば、自ら破れて癢痕となり、膣口縁に不正疣狀の隆起を爲す、之れを處女膜痕と云ふのである。

八 バルトリン腺及び諸他分泌類

バルトリン氏腺は膣内直ちに兩脇に各一個づゝ橢圓形の腺にして膣の入口に開口し此孔より灰色の液を分泌する。其他又數多の粘液腺あり皆膣口の周圍に開口し、輪狀に並列し、前方にありては尿道の周圍に存する粘液腺と相合す、前者と 同じく粘液を分泌するものである。

女子の生殖機關

九卵 巢

卵巢は小骨盤内にて子宮の後ろ上方に位し左右各一個づゝありて、輸卵管より子宮に連続して居る。其の大きさ男子の睪丸位にして長さ八分乃至一寸五分、巾五分乃至一寸厚さ二分乃至五分、重量一匁目乃至二匁あり、其の形状扁平卵圓形の蕃薇色を呈し、一つの圓き小さい隆起、及び凹處を以て覆はれて居る。幼時は卵巢頗る小なれども結婚期に至れば著しく増大し生殖器全體の上に最も強き勢力を有するに至るのである。生物の原たる卵を生ずる處にして緊要なる器官である。卵巢の構造は皮質と髓質とより成り、其の上を白膜にて被包す。今卵巢を解剖する時は中に二三十許の細胞を有するを見る。之れグラーフ氏胞と稱し、小さき

豆位の大きさであつて、中に白液充滿し、液の中央に一個の針頭大の卵子がある肉眼にては殆ど見ることは出来ない、大きさ〇・二乃至〇・三二密米にして其の中の最も大なる卵珠は辛く視得べく、他に多數の卵珠があるけれども、發育未だ完全でないから肉眼では見ることは出来ない。此等の總數約二萬乃至五萬にて女子一生中に排出する卵の數は實に四萬に及び、其餘は發育不全に終るか又は退化消滅するのである。

卵子は成年に至りて初めて生ずるものではない。生殖器構造の當初より悉く卵巢内に胚種となりて生ずるものなれども、今吾人が見る如く此等細胞も亦其中に包含せらるゝ卵珠も、總て同一様に成熟するものにあらずして、身體の生長と共に其一部より漸次成熟し且つ一箇だけは常に他の凡てよりも遙かに發育する。斯

女子の生殖機關

妊娠十ヶ月

くの如く卵珠は次を逐ふて發育するものであつて、結婚期より始まり月經閉止の期に至りて悉く發育し畢るのである。卵珠發育すれば卵巢を出で、暫く子宮に宿る。此の時若し妊娠を遂ぐれば留りて新たなる生物となり、妊娠せざれば空しく體外に逸し去るのである。

一〇 輸卵管

輸卵管は子宮の兩側にあり、卵巢を連絡する管にして成熟したる卵子は此の管を辿りて子宮に下るのである。長さ三寸乃至五寸大さ平均一分七厘(西洋人)あり、其の機能は一種特別であつて生殖作用に缺くべからざる機能と健康を維持するに甚だ緊要なる作用をなすものである。

輸卵管を解剖するときは、其管の内面は極めて柔き氈毛圓柱形上皮層よりなる氈毛とは微細なる毛である、此毛が輸卵管の内側に刷子の如く密生し、此毛が恰かも麥畑に於ける麥の穂が風の方向に靡くが如く子宮に向つて運動するのである。今卵子之れに移乗すれば、氈毛運動に由りて旋轉して子宮に移つて行くのである。此れに反して病的として氈毛は反對に卵巢に向つて運動することがある。例之精神に劇しい感動を與へたる時などあつて、此の場合には卵子は子宮に下ることを得ないのみならず、従つて妊娠することもないのである。若し此時男精茲に到達して妊娠する時は所謂子宮外妊娠となり母の命を殞すことがある。故に月經後七日以内に妻に心配掛けざる様に心懸けねばならない。又淋病にかゝり淋毒深く侵入して輸卵管を犯すときは氈毛を失ふを以て卵子子宮に下る能はずして不妊とな

女子の生殖機關

るものである。輸卵管は毳毛の運動のみならず、輸卵管自己も波動して卵巣より子宮に向つて収縮し、卵子を押し出す作用を爲すものである。

輸卵管の主なる作用は熟卵を子宮に送るものであるけれども、尙ほ此の外に婦人の健康を保持するに緊要なる機能がある。即ち卵巣は常に一種の物質を分泌する作用を営むものである。然るに今若し輸卵管病みて分泌物體外に出づること能はざる時は、種々の害を醸すに至るのである。例之子宮炎、水腫、神経障害、ヒステリー等の疾病は多く之れに原因して居るのである。

一一子 宮

子宮は卵巣より下り來りたる熟卵が暫く留つて精蟲を待つ所であつて、若し精

蟲と合する時は妊娠となり、十ヶ月間胎兒の發育する所である。

イ、位置 小骨盤内にて直腸と膀胱との間に在り、上部は前面なる膀胱の直ぐ上に位し、後面は直腸に接し、下端は腔内に突出して居る。

ロ、形状 西洋梨子状であつて、前後は扁平である、上端は僅かに前方に屈曲し稍々大なるも下端は狭小となり、腔穹の周圍より擁せられて腔中に下り後下方に向ふ、其長さは六寸弱、横徑四寸三分、前後一寸七分程ある。子宮の下部は下垂して腔の底に降り、腔は稍々上方に於て子宮の外部に附着す。上隅は左右各々輸卵管に聯なるのである。

ハ、構造 漿膜、筋膜の三層より成り其の収縮には最も驚くべき力がある。妊娠の際甚だ増大するも其後は又収縮して元の大きさに復するのである。又動脈、靜

婦人の生殖機關

婦人の生殖機關

妊娠十ヶ月

脈、神経等充分に分布し營養に富み、感覺鋭敏である。子宮の全體を大別して子宮底、子宮體、子宮頸の三部となる。

子宮底部は子宮の上部にして最も廣く、其の凸縁は輸卵管附着點を越えて尙上方に聳えて居る。

子宮體部は頸部との間に於て、下方漸次狹小となり、其後面は前面に比して甚だしく凸隆し、又其の側縁に子宮圓靱體、尙、後方には卵巢固有靱帶と云ふ一條の靱帶があつて子宮を懸吊して居る。

子宮頸部は狹小にして圓形を呈し、其最も下端は陰道の上端にて凡そ四分の一吋弱ほど下方に突き出し、指にて觸れば宛ら硬き瘤の如き感がある。又之に横斷したる裂口がある。子宮外口と云ふ。

凡そ人身諸機關中卵巢を除けば子宮は最も感覺鋭敏なる所にして、又成長の速かなるものである。然れども子宮は其の發達、機能共に卵巢に屬するものであつて、卵巢無ければ子宮は發育することなく、卵巢の作用停止するときは子宮の作用も又停止するものである。

婦人の月經

一月經に就て

月經とは女子の發情期より生殖機能の止む頃に至るまで、毎月二十八日目毎に定期的に、血液の排出するを云ふものにして、此の現象たるや健全なる女子に於て規則止しくあれども、不健全なる女子には、不規則たること多く、或は全く月

婦人の月經

早く交接するに
今月の月經日の晩に
あつたのは大きき

經を見ないことが稀でない。普通月經の期間は三日乃至五日間位であるが、往々これより長く、或は短いことがある。

經血は始めは少量にして其色が淡いけれども、一日を経過すれば其分量を増し色も濃くなつて宛も血液の如く、それより漸次又稀薄になつて遂に全く止むのである。

二月經不順

斯くの如く定期に、日數に其量に於て、殆んど同量の經血を排出するは、其の生殖器の健全なるを證するものにして其の日數と量とに至つては、人種、體質、習慣若しくは職業等によりて異にするは勿論であるけれども、同一人に於いて

一定せるものを順調と云ひ、否らざるものを不順と云ふのである。而して其の不順の状態は即ち左の如くである。

(一) 月經持長

(此れは一番多くして七日以上經血の有るものを云ふ)

(二) 過短月經

(一日又は數時間にして止むもの)

(三) 不規則月經

(有る月と無い月とあるもの)

(四) 月經の多少

(多量の月、少量の月あるもの)

婦人の月經

妊娠十ヶ月

(五)無月經

(月經の無きもの)

又予は平素何年にも無月經にして妊娠する時だけ月經を見、月經を見れば必ず妊娠すると云ふ婦人數多あるは今日迄屢々實驗するところである。

三 月經と全身との關係

月經は生理的にして病的にあらざるも、身心を刺衝して多少の異和を來たさしむるものであるから、健全なる女子に於いても、必ず其身心に多少の影響を受くるは免れざるころにして、先づ月經前に於ては左の徴候を呈するものが多いやうである。

(一)頭重、稀に頭痛發熱するものがある。

(二)腰と下腹に重感がある。

(三)呼吸及び脈は稍や緩慢となる。

(四)下腹部に少しく痛みを覺ゆ。

(五)食欲減じて消化機能少しく衰ふ。

(六)尿量増加して従つて度数多くなる。

(七)精神は憂鬱し睡眠を欲する事常より多い。

四 月經の期間と分量

月經の期間と其の漏らす血量とは關係がある。一般に期間長きものは従つて多

婦人の月經

妊娠十ヶ月

くの經血を排出する。然れども人種及び風土によりて一様ではない、獨逸國の婦人に於ては經血の量は一回(一期間)大約五勺乃至一合餘である。

五 月經の開始及閉止

(1) 月經開始

月經の開始は、貴賤貧富及び日常の生活狀態、各人の發育、文明の狀態及び氣候、人種等に依りて異なるのみならず、本邦の女子は十四歳乃至十六歳にして月經を見るものが多いのである。獨逸國に於ては、月經開始の時期十五歳なるが最も多いのである。通例は十三歳乃至十六歳であるけれども、土地によりて異なるものがある。即ち稀には甚だ早きは、九歳若しくは十歳にして始まるものがある。

或は遅くして二十歳乃至二十一歳にて月花初めて開くものがある。故に之れを平均するに、十四歳七ヶ月となる、今各國の統計を見るに、

我が國に於ける月經初潮の年齢は醫科大學に於て千十五人の平均年齢は十四年八ヶ月、緒方病院に於て千八百八十七人の平均は十四年九ヶ月であると云ふ。

地名	人員	平均
伯林	六、四八九	十五年一ヶ月
バイエルン	一〇、五七〇	十六年一ヶ月
平均		十五年三ヶ月

右表に依りて見るも本邦女子の月經開始は早くして、歐洲の女子はこれより遅いやうである。而して氣候熱き國は寒國より早きは生理上確定の事實である。

婦人の月經

妊娠十ヶ月

(ロ) 月経開始と文明及び貧富

又月経は同じ國に於ても文明の度によりて差異がある。今其の一例を擧げんにスキッツ氏が二千二百七十五人に就き觀察せる處に由れば、ウ井ンの女子が、平均十五年八ヶ月半なるに、村落に於ては十六年二ヶ月半であると云ふ、文明の程度の高下は、如何に月経初潮に大なる關係あるかを知らるゝのである。故に村落の女子は都會の女子よりも、月経開始するこゝが遅いのである。

貧富によりても又差異がある。即ち佛國のラリエール、ド、ボアモン氏に由るに下等社會の女子は、平均十四年十ヶ月、中流社會の女子は十四年五ヶ月、上流社會の女子は平均十三年八ヶ月である云ふ。即ち上流社會は下等社會よりも早

き(一)一年二ヶ月にして表を以て示せば左の如くである。

階級	平均
下等社會	十四年十ヶ月
中流社會	十四年五ヶ月
上流社會	十三年八ヶ月

英國に於てホリック博士が一千九百四十八人につき調べられたるものを表示せば實に左の如くである。

年齢	人員	年齢	人員
九年	一	十七年	一五七
十年	六	十八年	九七

婦人の月経

妊娠十ヶ月

十一年	五九	十九年	四五
十二年	一四六	二十年	一九
十三年	二五三	二十一年	四
十四年	四三七	二十二年	一
十五年	五〇二	三十年	一
十六年	二七〇	總人員	一、九四八

此表に見れば其大多數は十五歳にして、次は十四歳、最も少きは九歳、二十二年、及び三十歳にて月經の開始するものである。

六 月經閉止と生活との關係

月經の閉止期も月經開始期と同じく貴賤貧富日常生活の状態、健康の形態並びに人種、氣候、文明等に依りて相異がある。通例四十歳乃至五十歳なるも甚だ早きは三十歳以下尤も遅きは六十歳以上にして、尙ほ月經の存するものがある。ホリック氏の調査によれば、

月經閉止年齢	人数	月經閉止年齢	人数
二十三歳	1	四十七歳	3
三十四歳	1	四十八歳	10
三十五歳	1	四十九歳	7
三十七歳	1	五十歳	26
三十八歳	1	五十一歳	2
婦人の月經			

妊娠十ヶ月

四十歳	四	五十二歳	七
四十一歳	一	五十三歳	二
四十二歳	一	五十四歳	二
四十三歳	一	五十七歳	一
四十四歳	三	六十歳	二
四十五歳	四	七十歳	一
四十六歳	ト	計	七七

右の如くである。茲に閉止に關し、注意すべき事項を述べやう。

(一) 病的にて早期に月經の閉止するあり。

(二) 月經閉止期に子宮の筋腫等あつて、それが爲に出血するものをして月經と

誤想することがある。

七都鄙と經閉

尙ほ生活及び其の境遇が月經閉止の遲速に關係あるものにして、エウエル氏の百二十三人の女子に就いて調査したる結果に由つても知る事が出来る。

閉止せる年齢	都市の女子	村落の女子	計
三十七歳	一	一	一
三十八歳	一	一	一
三十九歳	一	一	一
四十歳	二	二	四
婦人の月經	二	二	四

妊娠十ヶ月

四十一歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十二歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十三歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十四歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十五歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十六歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十七歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十八歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
四十九歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一
五十歳	一	一	一	二	二	〇	四	一	二	一	一

八月経存続年間及び月経中止

五十一歳	二	二	二	三	二	二	三	二	三	二	二
五十二歳	二	二	二	三	二	二	三	二	三	二	二
五十三歳	二	二	二	三	二	二	三	二	三	二	二
五十四歳	一	一	一	二	一	一	二	一	二	一	一
五十五歳	一	一	一	二	一	一	二	一	二	一	一
計	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三	一一三

生理的にして月経開始の早きものは従つて早く月経の閉止を來し此れに反して遅く月経の開始せるものは従つて閉止する事が晚い。月経の存続するは平均三十婦人の月経

妊娠十ヶ月

年間であると云ふ、即ち月経は卵巢の機能を営むの徴であつて、此の期間は妊娠し得るものである。然れども著しく月経の遅れて初潮し又は甚だしく早期に月経の閉止するものは病的である。月経の一時中止する場合は少くはない。生理的には妊娠時及び哺乳期は閉止し、病的に來る無月経は後章に述べる通りであるが、其他月経時に交接する時は、爲めに月経の永く閉止する事がある。

九月 月経不順

月経不順とは、月経に伴へる全身の不快感、一過性疼痛、經血の漏出不定、二三日若しくは數日に亘れる月経持續の變化を云ふのである。月経共狀とは主として經血の著明なる増加或は減少、經期不正及び劇烈なる疼痛を名くるのである。

月経障害に、重要な病氣あり、一を無月経と云ひ、二を月経過多と稱し、三を月経困難と云ふ。此等は婦人科學に屬するのであるが、便宜上略述して置くこととしやう。

(1) 無月経

無月経とは、生殖器成熟期に於て、證明すべき原因なくして經血甚だ僅少或は全く缺損するの症を云ふのである。此無月経を一時性及び持續性の二種に分つ。持續性無月経は子宮及び卵巢の諸種の不全發育殊に子宮の缺損及び、不全發育に於て此れを見るのである。此の兩症を除く時は全生活中の無月経を見ること甚だ稀である。但し無月経であつても、作情慾に故障のないものは、屢々あるので

婦人の月経

ある。

一時性無月経は生理的に妊娠時及び泌乳期にあるのである。病的には子宮及卵巣、殊に慢性子宮實質炎の一徴として来る。又全身營養障害及び全身病に繼發するものが多い。例へば多量の出血後、貧血病、結核慢性腎臟炎、白血病、糖尿病、パゼトー氏病、進行性癲癇、チブスの經過後に於て見るやうである。彼の脂肪過多症に來る閉經も亦、茲に算入す。又劇甚なる恐怖に逢ひ、悲哀なる訃音に接し、劇烈なる精神の感動に由つて、來ることもある。近時、鼻の病即ち肥、性鼻粘膜炎に時として來るここがある。而して月経の來るべき時に經血は無くして、頭痛、腰痛、胸内苦悶、胃腸障害に兼て整然反覆せる、他部の出血、鼻、肺、胃直腸、創傷等の出血を發するものがある。これを代償月経と云ふのである。

無月経の豫後は、固より原因に關す、先天性にして、子宮の發育不全に基づくものは時として治療すれば治癒するのである。又全身病より來るものは、原病と豫後の運命を同うするのである。

これが療法は一時性閉經に於ては、原因に治療を加へ、肉類、酒劑、ヘモグロビン製劑等の滋養分を與へ、起臥を節し、過度の運動、海水浴、冷水摩擦、山間轉地等の強壯療法を行ふのである。

營養不良にして血行不足するものには、通經劑即ち蘆會、サピナ、サフラン等を與ふ。其他溫坐浴又は攝氏五十度温湯（手を入れて熱い位の湯）を腔内に注ぐのである。

肥満の人には硫苦、硫曹の如き下劑を服用し、或は子宮按摩、又は子宮肥除術

妊娠十ヶ月

を行ふ等、醫治に依り治するやうにせねばならぬ。

(ロ) 月經過多及び持長

月經は三四日乃至七日が通常であるが、稀に十日も持長するものがある。過多とは、經血の分量の多きことを云ふのである。

原因は、第一は子宮内膜炎、第二は子宮の實質炎、第三は子宮の筋腫、之れが一番多いのである。此の三つが主なるものであつて、其他子宮の後屈症、子宮周囲炎殊に慢性輸卵管炎には、月經持長が多いのである。全身病としては、インフルエンザに罹りし時は月經長びき熱病又は腎臓、心臟病の人は、往々持長を來すのである。

療法は原因たる、病を治療することである。其他止血劑を内服する、出血止まざる時は腔内に、タンポンを入れ、醫師に依り、エルゴチンの注射を受け下腹に氷袋を當て静臥するのであるが、是等は醫師の指示を受くべきである。

(ハ) 月經痛

月經の時に、僅かに下腹部に鈍痛のあるは當然である。然し痛みの爲に床に就き、又は嘔吐を催ほし或は發熱する等を月經痛と云ふのである。斯う云ふ事のある時は(一)排膜性月經痛で、膜の出る爲に非常に痛むものとす。消息子を入れて検するに、粗糙又は肥厚せるこじがある。子宮の前屈高度なる時は、月經痛を來す。モ一つは子宮筋腫のある時は月經痛來たる。其他子宮周圍炎、殊に輸卵管炎

婦人の月經

實質性結締織炎のある時は、月經痛の來ることがある。
療法は各原因を治療しなければならぬのであつて、醫師の治療を受くべきである。

一〇 月經時の攝生

月經に妊娠とは大なる關係があるのであつて、月經は一に妊娠せんが爲めの作用に外ならずして、之を缺くもの、又は假令缺かなくとも順調でないものは、多くは不妊を免れない。されば月經は、婦人に取つて最も重要なものであつて、且つ生殖の基であるから、婦人は意を致して攝生を守り、之が異常を招かないやうに心掛けねばならぬのである。左に月經時に守るべき攝生法を列記すべきも、

殊に月經の前日には出來得るだけの攝生を肝要とすべきである。

一、月經中は精神を安靜にしなければならぬ。例へば驚愕、悲哀、憂苦等總て心の刺戟を避くべきである。

二、月經中は身體を安靜になし、運動、勞働は宜しくない。要するに月經中は成るべく休息して、立ち働きなごも控へ目にし、長く腰を掛け、長く坐らないやうにするがよろしい。運動すると言つても靜かに穩かに散歩する位に止めなければならぬのである。

三、刺戟的飲食物を避け、且つ過飲暴食を慎しみ、消化し易い食料を攝取するべし。

四、殊に消渴のある婦人は、月經の前日より靜臥しなければならぬ。

五、月經中は斷じて夫婦の關係を慎まねばならぬ。

六、寒冷の氣に觸れず、殊に下腹部、腰部の冷えない様注意しなければならぬ。成るべく風に逢はないやう、殊に寒風に吹かれたり、風雨に逢つたりすれば感冒に罹り易く、さうするに所謂下風を引き、子宮及び子宮附屬器の病氣を惹起することがあるから注意せねばならぬのである。又水に濡れることは斷じてよろしくない、彼の雨に濡れたり、水の中に入つたりすることは禁じなければならぬ。海水浴や、水泳などは月經中は嚴禁し、農家ならば、挿秧又は雨中の耕作などは嚴禁すべきである。

七、入浴、坐浴を爲さざること。

八、素人は消毒した綿を腔につめて置くやうであるが、斯う云ふことは醫師に

して初めて安全に出来るのである。何故かと云ふに、素人がすると假へ消毒した綿であつても、之を取扱ふ手に細菌の附着は免れないのである。殊に消毒もしない紙や、布片、綿などの詰物は甚だしく危険である。然らばどうしたらよいかと云ふに、消毒したものを外部に充てゝ置くのが一番よいのである。例へば月經帶の如きは、消毒したるガーゼ若しくは綿を小さく重ねかけて局所に當て、その上に普通の青梅綿半枚程を重ね置き、之を丁字帯にて固定し、汚染する毎に下層より取り捨て、新しいガーゼ若しくは消毒綿を少しづつ、取り換へて置くやうにしたならば、最も清潔を保つ事が出来るのである。消毒綿又は消毒ガーゼは醫師の所ではシンメルブツシユ式の消毒罐と云ふもので消毒するのであるが、素人の所では茶罐の二斤入位のもを、蓋と身と重なる部分の周圍に圓き穴を十個程明け

妊娠十ヶ月

此の中に脱脂綿又はガーゼを幅二寸、長さ三寸位に切つて十分に入れ、その穴の明いたまゝ蒸籠に入れ、三十分間位蒸し、蒸し上つた後は蓋の穴と身の穴と一致しない様に反對にして外氣の侵入を防いで置き、一枚宛取り出して局部に當てるのである。

九、殊に月經の初潮は心理的大變化を來すものであるから、母親は之に對し充分の慰安と攝養法を教へて置かねばならぬのである。

十、異常あるも決して素人療法を加へてはいけない、必ず醫師の診療を受くべきである。

十一、月經中は身體殊に局部の清潔が大切である。一體不健康は不潔から生ずる場合が多いのであるが、月經中は殊にだらしなくなり易いものであるから、大

に注意しなければならぬ。さなくとも最も不潔なるべき局部は、常に清潔にすべきは勿論だが、月經中は一層不潔になるから、大に清潔法を施さねばならぬ。如何にして清潔にすべきか云ふに、毎日數回微温湯にて外部を洗ひ、その附着したる經血は、消毒したる綿、布片の如き物にて、之を拭ひ取るが宜しい。それか云つて、腔の中まで洗つたり種々の詰物は最も危険で、これが爲めに悪い細菌が浸入して婦人病を起したり、その他詰物の爲めに經血の流出を滞らす虞があるから、此の如きは一切しないやうにするのである。

十二、睡眠は平常よりも安かに長くするのである、睡眠不足の如きは平素さへ爲めによくない程であるから、月經時は殊更注意せねばならぬ。

十三、月經中に限らず、便秘は婦人病と密接の關係があるから、平素よく注意

婦人の月經

妊娠十ヶ月

して、此の病癖に習されぬやうにせねばならぬのである。常習便秘の癖ある人は毎朝食前に、コップに一杯づゝの食鹽水を飲用するがよろしいのである。

經血の分量、時日の長短、月經の距離、月經の初發等は人々相違せるものであるから、若し相違があつても健康であつたならば、其の異常は疾病でない。

種々なる異常を感じるも、尙等閑に附する時は、不妊症或は到底醫治すべからざる疾病を誘發するに至るのである。さればと云つて不適當なる藥劑を用ふるの

は、之を放置するよりも尙ほ害があるのである。彼の藥類及び素人療法の危険は實に然り。病を重態ならしむるのは皆賣藥と、素人療法である。専門醫師の診

察を要するは言ふ迄もないのである。婦人が月經期に達したる時は牛素よりも尙ほ一層注意して其の身神を保護し、殊に嚴寒、酷熱に遭ふことを避け、精神上の

過勞は避くる事に努めねばならぬのである。

結婚と妊娠の關係

一 結婚と妊娠

英國の碩儒ミル曰く「社會は婚姻に因りて組み立てらる。』、實に婚姻は以て家をなし子孫の繁榮をはかるものであつて、人倫の大本である。故に苟もこれを輕々視すべからざるは勿論であつて、年齢、體質、系統等を撰定の上でなければこれを行ふてはならぬ。然るに世には春情の發動にまかせ、年齢、體質等の如何を顧みず、單に情交を恣にせんが爲めに、若くは父母兄弟の強ふる所となり辭するに途無きが爲めに婚を結び或は野合早婚等をなし、此の大本を忘れて天與の

結婚と妊娠の關係

義務を完うする能はざるものがある。如斯は常に天意にそむくのみならず、依つて以て不和姦通、離婚等の結果を生じ、道徳上よりは勿論法律上よりも許し難き罪人となつて、結婚によつて享け得べき幸福を却つて褫奪さるゝが尠なからず戒慎すべき事ではないか。

二 結婚の種類

結婚の種類を左の數種に別ちて論じやう。

(一) 情婚 それは年齢、體質、系統、教育の如何を問はず、心情の馳するにまかせて、相愛するまゝに結婚するを云ふのである。如此は一時愛情に満ち常住座臥共に甚だ樂しきものあるを見れ共多くは子をもうくる事が出来ない、假令これを

得るとも十中の八九は健康ならざるか、不良に陥つて、終生其の樂みを持続することが出来ないのである。

(二) 婚體 愛情の如何を別個の問題として専ら體質のみを主とし結婚するものをいふのである。如此は健康の子を得るには甚だ適するけれども、往々夫婦間の愛情乏しく、爲めに時として他の誘ふ所となるや、男女共に其の妻を棄て、夫に背いてその誘はるゝまゝに赴き、互に節操の徳をやぶるに至るのである。

(三) 惡婚、或は父母の強制より或は世間の義理より、其他財産、地位、乃至或る目的の爲めに結婚するを云ひ、愛情、體質、其餘の如何を顧みざる背理の甚しきものがある故に、姦通、離婚、不和、殺傷等の罪惡を醸し連理比翼の歡を夢想だもすることが出来ない。

妊娠十ヶ月

(四)良婚、双方の愛情濃かにて體質亦よろしきに適ひ、これを系統より見るも境遇より言ふも、一事の缺くる所なき最良、最善の結婚と稱するものであつて、琴瑟相和し、春風堂に満つるの生涯を送り得るもの、一にこゝに存するのである如斯にして初めて子孫の繁榮と一家の幸福とを享け得べく夫婦間の快樂これより多大にして長久なるはなし、善行美德の良心を有し、家運隆盛の基礎を得んとせば、父母たるものは其の子に對して斯かる結婚を撰び、男女各自に於ても一時の血氣に馳せず常にこゝに心掛くべきである。

三 結婚と年齢

人種風土の如何によつて一定せざるのみならず同一の人種、同一の風土に於て

も人に依りて一樣ならざるが故に一定の標準を定め難きも、其の平均に於て早きに過ぎるも亦遅きに過ぎても共によろしくないのである。醫學の最も發達せる獨逸にては法律を設けて男子二十五歳以上、女子二十一歳以上にあらざれば結婚することを許さないこととし、生兒の數を増加し強壯長壽の子を擧ぐる事を得たのである。

我國に於ても、男子十八歳以上、女子十六歳以上にあらざれば其結婚を許さざるの制令定められて以來、早婚の弊を一掃せしかの觀あるけれども、其實地方人士の間には今尙秘密の裡に早婚の舊慣が依然として行はれて居る。未だ豫期の効果を見るに至らざれども、法定年齢に於ても、實は尙ほ早婚の嫌ひ無き能はず、若し眞に從來の習慣を一洗し、生理上適合の年齢云はゞ男子二十歳以上三十歳

結婚と妊娠 關係

胎生

妊娠十ヶ月

以下、女子十八歳以上二十五歳以下を最も適當とするのである。

四 結婚と體質

體質ミ生殖作用とは素と密接の關係を有し、其容貌女子の如き男子、男子の如き女子は共に妊娠不良で、男子に於ても體格完全で、多血質のもの最も生殖力を有し、就中婦人にあつては腰部の周圍の太き者、胎兒の發育を良好ならしめ、分娩も亦容易である。彼の細腰柳の如きは最早今日これを美人として歡迎すべきものではない。

五 結婚ミ性質

世には夫婦間の愛情に缺くる所なく、其の生殖器に異狀を認めない夫婦の數年若くは十數年同様して子をもうくる能はざるものがある。然るに此の夫婦の或る事情の爲め離婚するに至るや、互ひに他の男女と結婚して、各自子を儲くるは決して珍らしくはない。然れども既に愛情と云ひ、生殖機能と云ひ共に間然する所無き男女が、愆くまで妊娠を左右さるゝこと、或は互ひに愛情ありつゝも、これが一致を來す能はざるに原因するには非らざるかとも云ひ、又然りミ斷言するものがあるけれども、恐らく如此は愛情よりも性質の適合如何にあること云ふ方適當である。解し易き例にて、牛馬犬猫の類は關係慾と生殖力を有することは事實である。併しながら人間に於ける如くに愛情を有せぬ。而も其の動物は人間よりも蕃殖をなすこと容易で、牝牡相接すれば殆んど其都度受胎するものが尠なく

結婚と妊娠の關係

はない、然れども其の蕃殖盛んなる牝或る他種の生殖力完全なる牝相接さ
するに決して受胎せざるこゝあり、これ全く性質の適合せざる故にて其こゝに原
因することは獸醫の説も牧畜者の意見も一致して居る、鑑みねばならぬのであ
る。

六 結婚と系統

萬物皆遺傳といふものがある、容貌、性質の親子相傳ふる如く、畸形、疾病、素
因、妊不妊等も亦遺傳する、故に系統を尋ねて後結婚すべきは勿論、又其系統は
結婚者の父母、祖父母を糺すに止まらず、遠く其が祖先をも究めねばならぬ。何
となれば父母の各種遺傳が其子乃至孫に發せずして往々曾孫等に發することが罕
ない、更に詳しく言へば左の如くである。

(一) 畸形の遺傳。四肢毛髮の異常より母斑兔唇の如きは共に此の種の遺傳であ
る。

(二) 疾病の遺傳。微毒、痛風、精神病、耳聾、色盲、血友病、近視、神經過敏
症等。

(三) 素因の遺傳。癩病、結核病等
と從來此等の疾病は遺傳するものと誤認されたけれども、今日にては素因の遺傳
たること確實となり、病源に對する抵抗力弱く爲めに幼少の間に早く傳染を免か
れざるものである。

(四) 妊娠の遺傳。分娩せし子が男子のみにて、女子を得るこゝになきは共に遺傳

結婚と妊娠 關係

にして、又父母は僅かに一子を得たのみにて、その子の儲けたるも一子に過ぎず、其の一子成長して結婚するや或は又一子を儲け若くは子なくして終るの例尠くはない。これ等も同じく遺傳である。

(五) 智鈍賢愚。等の性格も亦遺傳せらる、其他夭折、長命共に遺傳すること多く、是等の遺傳は親より子に又は二三代も隔てたる子孫に遺傳することあり、勞々いづれよりいふも結婚に際して系統を亂し、又亂さねばならぬことは争ふべからざる事實である。

七 血族結婚の弊害

血族結婚の弊害多きは、今や一般の認むる所となりたるも、地方にあつては尙

往々これをなすもの多く、爲めに法律も風俗習慣を斟酌しつゝあるも、其の甚だしきものを禁じ、従兄弟以上の親近者の互ひに相婚するを許さない、彼の不妊、流産、畸形、聾啞、白痴、精神病者、癲癩、癩病等の多くは、全く此の血族結婚に原因するのである。

今假りに茲に腦の強くして肺の弱い系統と、肺の強くして腦の弱き系統とあつて結婚をなしたりとせんか、其の生れたる子は中和されて腦も肺も健康なる兒を得るのである。此れに反し血族結婚なるときは双方共腦又は肺の悪しきものなるを以て、其の子は白痴又は肺病なるものである。此れは其一例を示して説明せらるに過ぎざるも、其害や此例の如き簡單なるものではないのである。

八 異人種との結婚



異人種間の結婚は殊に差異の甚だしき人種相婚する故に虚弱なる子を生まる若しくは不妊を來し或は分娩困難となり、三代にして絶滅すると稱へられて居る。

女子關係不能

一 不能の種類

女子の關係不能を來すべき疾病は(一)腔性關係不能(二)子宮性關係不能、(三)性慾缺乏症等である。

二 腔性關係不能症

(イ)陰門及び腔の先天性に一部又は全部癒着せるものを云ふ、此れは手術によつて、治癒せしむることが出来る。

(ロ)腔痙攣とは腔口の刺戟感受性過敏にして自覺的にも疼みを感じて軽く觸る

女子關係不能

妊娠十ヶ月

も迅ち痙攣を發するのである。本症は多く處女を侵し或は初婚の婦人に現はるゝものであつて、通常膣口の非常に狹隘なるか、處女膜の硬韌なるか又は處女膜の殘存するに由るのである。

(ハ)膣口の閉鎖又は狹窄であつて、先天性の陰唇の癒着又は處女膜の閉鎖より來るか又は外傷(やけど、負傷、手術又は病的等)痘瘡等の場合に癍痕を形成し又は陰唇象皮病、陰唇ヘルニヤ(脱腸)等に於て後天的の狹窄又は閉鎖を來すものである。

三 子宮性關係不能症

子宮脱は關係を困難ならしめ、或は嫌厭の情を起すに至るものである。

四 性慾缺乏症

本症は諸種の生殖器の障害より來るものあり、又早婚及び身體の發育未だ成熟せざる際に於ける妊娠分娩者に發することがある。其他不妊性の女子に多く、此種の女子は肥胖するを特徴とする。肥胖は卵巢の異常より來たること多きが故に妊娠せざる所以である。如此女子は、益々神經沈衰憂鬱に趨き、遂にはヒステリ症に陥りて病辱に呻吟するに至る。
療法は先づ其の原因の如何を確め、陰部の異常、疾患あるものは速かに之を除去し、併せて催春療法を行ふのである。

女子關係不能

妊娠十ヶ月

五 幼年者房事の害

幼年時代は未だ身體成熟せざるを以て此の際に不謹慎を爲す時は、身體の發達を阻止し、虛弱、營養不良、貧血、神經衰弱、ヒステリー、生殖器發育不全等來し、若し幼弱なる父母より生れたる兒は左の如き結果を見るこゝが多いのである。

(イ) 半産若しくは死産

(ロ) 畸形

(ハ) 低能兒

(ニ) 虛弱又は天死

六 老年者の害

男女を論ぜず高老に達し尙ほ謹慎を破るのは害がある。女子に在つては月經閉止後は、自然情意減退するものなるも、男子は然らざるを以て其の害を蒙ることが多いのである。

妊娠認定法

一 妊娠の特徴

妊娠は婦人の大役である。若しこれを知らずして不攝生をすれば、母子共に飛んだ不幸を來すのである。今妊娠は如何にして之を認定するかと云ふに、素人は

妊娠認定法

妊娠十ヶ月

月經閉止を以て最も認め易い特徴とする。併し乍ら單にこれのみにて直ちに妊娠なりと早合點する事、往々誤る事がある。一體月經閉止は單に妊娠の時のみならず、婦人病其他の疾病の爲めに然るこゝがあり、又其の反對に妊娠後も稀に月經の如き子宮出血を見ることがあるから、妊娠を認定するは、月經閉止以外左記の種々な特徴を検べねばならぬのである。

二 妊娠と乳房

乳房は妊娠後二ヶ月目に變狀を呈し、次第に膨脹して手を觸れると平素より温暖であり、尙ほ進んで第四ヶ月乃至第五ヶ月になると乳房と乳暈とが暗黒色となり、皮下の靜脈が青い腺の如き形を表はし、又乳房の知覺も過敏となりて、これ

に壓迫を加へると無色の液を乳嘴より分泌するのである。

三 妊娠と腹部

腹部は月の進むにつれて胎兒が發育し、子宮が次第に擴がるから、漸次膨脹して來るのである。而して妊娠腺と言つて腹部の中央その他腹部全體に褐色を帯びた腺の如きものが露はれて來るのである。

四 妊娠と顔面

婦人の顔色は男子よりは肌理が細かであつて、而して美しいのを常とするのであるが、妊娠後は痣の如きものが所々に出て、眉毛の如きは脱け落ち、容貌が何

妊娠認定法

妊娠十ヶ月

處さなく平常と異つて來るのである。

五 妊娠と便尿

妊娠すると子宮が膨大し、尿を蓄積する膀胱が、子宮の前方にあり、糞便を蓄積する直腸は子宮の後方にあり、子宮はその中間にあつて、是等を漸次壓迫するから、従つて便尿に頻りに行きたくなるのである。

六 妊娠と悪咀

妊娠すると一時食欲が減退して、平常好んだ食物も厭ひ、却つて酸味その他の變つた味を嗜む様になるのが普通である。往々にして妊娠二ヶ月乃至四ヶ月頃か

らは悪咀と言つて食欲が大に減退し、嘔吐を催し、一體に食物を嫌忌するやうになるのである。之等は入抵六ヶ月目になると大分快くなり、食欲も進むが、一層甚だしい悪咀は、食欲全く絶え、眼に食を見るのさへ嫌になつて、全く營養物を取ることが出来ないから、身體次第に衰弱して、甚だしきに至つては人事不省に陥り、嚙語を發するものさへあるのである。少々事は左程案するにも及ばないのであるが、此の様な惡徵候を呈すれば、醫に請ふて人工墮胎法を行ふて、母體の生命を救はねばならない、併し假令これを行ふとも母子共に死ぬることがあるから、豫めよく注意を拂はねばならぬのである。

七 妊娠と精神の異狀

妊娠認定法

妊娠十ヶ月

妊娠すると常に身體の異状を來すのみならず、精神上にも影響を及ぼし、平素の性質が一變した様な有様となる。人に依つて異なるのであるが、概して知覺過敏となり、鬱憂し易く、譯もなくして或は怒り、或は悲み、且つ記憶力や理解力が減じて、甚だしく物に好悪を生ずるやうになるのである。

八 妊娠と注意

以上は最も明かなる徴候であるが、勿論妊娠は生理的作用であつて病氣ではないが、斯く身心に變化を來した爲めに病氣に對する抵抗力を非常に減ずるから、餘程攝生をよくしないと、病氣に罹り易く、胎兒にまでも影響を及ぼし、大變なことになるのである。それであるから妊娠中は別項に述べた攝生に注意しなければならぬ。

ばならぬ。

妊娠中の攝生

一 妊婦の精神安靜

妊娠は前章に述べた如く、身心に非常なる變化を及ぼすものであつて、且つ妊婦の精神は甚だ興奮したる状態にあるのであるから、つとめて精神の攝生、即ち安靜爽快にするやうに心掛けねばならぬ。それであるから、成るべく家事上の心配をせず詩歌、繪畫、音樂などに依つて耳目を樂しめ、時には夫妻相携へて戶外に散歩をするとか、庭園を歩くなどして身體を慰むるのである。妊娠中は精神の劇然なる感動を爲すもので、即ち喜怒哀樂が事毎に露骨に其の情を動かすもので

妊娠中の攝生

妊娠十ヶ月

あるから、夫たり、父母、舅姑たる人は、妊婦に對して成るべく寛大にして、心配をさせぬやうにしなければならぬ。然らざれば、其の物事に非常に感動したり心配したりする結果は、流産或は早産をするやうなことがある。

二 妊婦の居室

妊婦の居室は、夏は成るべく涼しく、冬は暖く、而して濕氣を含ませぬやうにせねばならぬ。空氣は常に新鮮に、絶えず日光の射入するやうにすべきである。

三 妊婦の衣服

妊婦の衣服は時候に應じて、程よく着るやうにし、つとめて清潔にして、襦袢

の如き、腰卷の如き、兎角皮膚に直接に出るものは、絶えず洗濯をして清潔なるものを用ふるやうにすべきである。

四 妊婦の腹帯

従來我が國に於て使用し來つた腹帯は、腹部を温め子宮の動搖を避ける等の効力がある。併し乍ら餘り固く緊めると胎兒の發育を妨げ、母體の血液の循環を害するやうなことになるから、腹帯を爲す時には注意して、全腹部を軽く纏ふ位の程度に於てせねばならぬ。而して腹帯は妊娠五ヶ月より着用するのである。

五 妊婦の起居動作

妊娠中の衛生

妊娠十ヶ月

妊娠中は重い物を擔つたり、又は之を提げたり、背脊つたり、階段を上下し、汽車、馬車、人力車、自動車、電車等に乗る、その他過激な運動をしてはならぬ昔から躓くのは悪いと云つて居るが、歩行する時にも、充分に注意して、躓かぬやうにせねばならぬ。若し是等の事に注意しないと、往々にして胎兒に變化を來し、爲めに非常な難産の原因となることがあり、又は早産、流産を起すに至ることもある。

六 妊婦の睡眠

妊娠中は神経が過敏に陥り易いから、睡眠時間を一定して、夜は成るべく早く臥し、朝はつこめて早く起きて、庭園を散歩するなどして新鮮の空氣を吸ふやうにしなればならぬ。

七 妊婦の頭髮

妊婦は常に頭髮を清潔にし、成るべく櫛や笄又は鬘等は用ひないやうにし、束髪に軽く結ふやうにしたがよろしい。

八 妊婦の入浴

妊婦はつとめて入浴するやうにし、身體の清潔を保ち、血液の循環を促し、新陳代謝をよくし分泌排泄を促す様にすべきである。併し餘りに長く入浴するに腦貧血を起して卒倒することがあるから、程よき程度に於て入浴すべきである。

妊娠中の養生

九 妊婦の腰湯

妊婦は特に身體下部を清潔にするこゝにつとめねばならぬ。毎日腰湯を使ひ、又はイルリガートルに微温湯を入れて局部を洗滌するのである。妊娠中は分泌物が多し爲めに、局部の周圍に附着して不潔となり、之が刺戟の爲めに癢痒を來し皮膚を糜爛する事がある。故に毎日必ず腰湯を怠らぬやうにすべきである。

一〇 妊婦の便通

妊娠中は兎角便秘し易いものであるから、便通に注意せねばならぬ。若し便秘三日位に渉る時には灌腸を爲すか、カスカラサクラダ錠を服用して便通を圖るべきである。

きである。尿は月の重なるに従つて度数が多くなるが、若しその量が減つて尿道に痛みを生ずるやうな事があつたならば産婆なり醫師なりに相談すべきである。

一一 妊婦の食物

妊娠中は自分の攝取した營養分を胎兒に分與するのであるから、平生よりは餘計に滋養物を食べねばならぬ。産後の肥立ちの悪いとか、小兒の發育の悪いのは大抵母體の營養不十分なるより來るのであるから、營養を佳良にする事に注意すべきである。併し營養を佳良にするからと云つて不消化物を食しては悪い。成るべく淡泊で消化し易い營養品を攝取するやうにせねばならぬ。尙ほ刺戟性の食物即ち辛味、やく味の如きは避くべきである。

一二 妊婦の乳房

妊婦の乳房は皮膚薄く、過敏なる時はアルコールを用ひて時々拂拭し、乳頭の發育不充分的時は、軟に揉んで、毎日十回位指にて之を引き出すやうにするのである。

一三 妊婦の浮腫

妊娠すると、殊に産み月が近くなるに従つて往々兩脚に浮腫を起すことがある世には分娩さへすれば治癒する云つて之を構はずに置く人もあるやうであるが注意しないと時に大事に至る事がある。浮腫を避けるには、餘り長く坐し、餘り

長く起立して仕事をしてはならぬ。臥する時には足を高いものに舉げて置くやうにして豫防すべきである。兎に角浮腫を起したならば、産婆なり醫師なりに相談すべきである。

其他に就き異状のある時は速かに醫師に診斷を乞はねばならぬ。

子の無き原因

一 女子の不妊症

女子の不妊にも先天、後天の別がある。卵の形成不健全にして、充分成熟することのない場合、精蟲と卵子との結合に障碍のある場合、妊娠に必要な子宮が卵の保育に適せざる場合は共に不妊たるを免れずして、先天的不妊は卵巢の

子のなき原因

妊娠十ヶ月

發育不全、子宮發育障害、交接不能等にて、後天的不妊は、卵巣炎、卵巣腫瘍、子宮諸病等であつて、又別に手淫亂行、交接過多、各種避妊法等人工的に不妊を來す例は甚だ尠くはないのである。

二 子宮性不妊

子宮に原因する不妊症とは、子宮發育不全に因する、位置、形状の變位、淋毒性の頸管加答兒、子宮内膜炎等にて乃ち精蟲と卵子とが容易に會合することの能はざるに由來するものである。

三 卵巣不全と不妊

卵巣の不全は卵子の形成不能を來たし、爲めに不妊に陥入るものもあるも、此の形成不能には絶對的と比較的とあつて、前者は卵巣の缺損、變質等の場合に見る所であるが、後者は卵巣炎、同周圍炎、同萎縮、同腫瘍、神經病、肥胖病、腺病貧血、酒精及び莫比中毒等に因る。即ち卵巣缺損すれば、月經を通ぜず、到底妊娠の目的を達することが出来ないのである。また肥胖病者にありては、腹部脂肪の爲めに卵巣常に壓迫せられ、且つ下腹並に外陰部肥滿して充分の關係を遂ぐることも能はず、彼是不妊を來すものである。

四 淋病と不妊

男子にありては淋病の爲めに或は睾丸炎を起し、否らざるまでも炎症によつて

子のなき原因

妊娠十ヶ月

卵巢發育不全

卵巢水腫(脹滿)

一時不妊症

無月經

(女子)

慢性卵巢炎

肥胖病

貧血、腺病、及び酒精、莫比中毒

(乙表)………精蟲卵子結合障礙によるもの

神經中樞疾病

睾丸萎縮

(男子)

無精蟲

輸精管萎縮

老人性萎縮

陰莖畸形

尿道狹窄

精蟲減少

淋病及び微毒

神經性萎縮

一時的不妊症

(男子)

甲

卵子被膜肥厚

喇叭管畸形及缺損

子のなき原因

妊娠十ヶ月

絶對的不妊症

子宮缺損

(女子)

子宮閉鎖

腔缺損

子宮位置變轉

子宮腫瘍

腔閉鎖

外陰部畸形及び疾病

處女膜異常

頸管狹窄

一時的な不妊症

(女子)

(丙表)……………妊卵保育不能によるもの

絶對的不妊症

子宮發育不全

子宮粘膜炎

慢性子宮内膜炎及び子宮腫瘍

子宮周圍炎及骨盤腹膜炎

子宮位置變異

一時的な不妊症

七 必ず妊娠する法

必ず妊娠を爲さんせば、男女共に身體健全にして、能く攝生を守り、亂行の疾なきを要するのである。

子のなき原因

分娩時の心得

一 分娩の種類

凡そ分娩の種類は、大別して自然産、人工産、尋常産、異常産、流産、定期産、晩産の八種であつて、自然産とは母體自然の力を以て分娩するをいひ、人工産は醫師の力を以て早産術、鉗子術等を行ふものであつて、尋常産は所謂安産、異常産はその反對の難産の謂である。又流産とは妊娠七ヶ月以内に分娩するのであつて、これは多くは生活力を有しないから、其の産兒は死亡するのである。早産は七ヶ月以上なるも、妊娠初期に達せずして分娩するを云ふのである。但し此の場合には胎兒の健康と攝生の如何に依つて生活力を得るものである。而して定期産は

最も完全に十ヶ月の期満ちて、分娩するもの、晩産とはこの十ヶ月を超えて分娩するものを云ふのである。

二 閉經と妊娠

平常の場合に於て、女子の生殖力は月經の有無と相一致するものであるが、月經終閉せぬ限り、生殖器に異常さへなければ妊娠するものである。然し排卵機は必ずしも月經と随伴するものではない、時として月經の無い婦人であつても妊娠することがある。然し如此は異例であつて、多くの場合には月經の終閉と相前後して排卵機も絶止するのであるから、先づ妊娠することはないを云つてよろしい。

三分娩機轉

妊婦分娩の機熟すれば、先づ一種の腹痛を發する。これ所謂陣痛にてその痛み當初は暫微なるも漸次劇増して頻數となり、總て胎液(羊水)を漏らす。俗にこれをみづを見ると云つて居る。これ造化の至妙なる用意であつて、分娩に先立ちて産道を濕すものである。これと同時に子宮口も亦次第に開大して、分娩を容易ならしめ、既にして、胎兒を産み終らば、先の陣痛は漸く止み、次いで胎盤(後産)を産下するのである。慙くて子宮周壁の薄くなれるも俄かに收縮復舊せんとするので、更に一種の腹痛を持續し舊態に復するに及んで、腹痛全く止むのである。其の間凡二三日より十日内外を要するものであるが、普通哺乳によつて收縮を早

め、随つて腹痛の持續も自ら長からざるに至るのである。而して分娩の終りは胎盤脱落して産下し、其の脱落によつて惡露を出すまでである。

四分娩時の苦痛

分娩の機轉熟して出産に臨むや、其の種類の輕重を問はず、共に一種の苦痛を感ずるのである。此の苦痛は假令難産でなくとも、胎液(羊水)を早く漏らし盡す時は一層甚だしいのであるが、本邦婦人は比較的外國婦人よりもその度輕く、その時間も短かいのである。又再産婦は初産婦よりも、三産婦は再産婦よりも共に回数を重ぬるに随つて輕くなつて來るし、又苦痛も短かいのである。

3 坐産と臥産

坐産とは舊式の分娩法であつて、産婦は前に寄りかゝりをしつらへ 身體の過半をこゝに支へ、娩出せしむるのであるが、産後の居直り等、母體を動搖するの弊があるから、危険の伴ふを免れない。故に近來は専ら臥産を採用するやうになつたのである。世には座産の分娩を容易ならしむるものなるに却つて困難なる臥産を稱用するなど云ふ人も尠くないのである。これは誤解の甚だしきものであつて、胎兒は元來母體の位置如何により、其が娩出の機能を異にするのではないのであるから、産後の危険の伴はない臥産を奨勵すべきである。

六 分娩時の負傷

會陰部其他外陰部に於ける分娩時の負傷は、創傷の新らしい中に、及ぶだけ早く防腐的縫合を施し、速かに癒合するやうに手當てをしなければ、治癒を遅うするのみならず、往々子宮其他に後害を遺し、爲めに不妊症を生じ、若しくは次回の妊娠分娩に故障を來たすことが多いのである。故に進んで手術を受けるやうにしなければならぬのである。

七 分娩後の子宮

分娩後に於ける子宮及び腔の状態を診するに、子宮口唇は緩く腔内に垂し、下

分娩時の心得

妊娠十ヶ月

子宮部、子宮頸乃至膈部は延長して柔軟なる管状となり、子宮頸は其後徐々に短縮するけれども、内口は産後十日前後まではまだ収縮しないのであつて、外口はそれよりも更に久しく開いて居るのである。又膈部の弛張の如きは直ちに減退して會陰も速かに縮小するのである。尚ほ初産婦、輕産婦の別なく、分娩時に若し小さい創であつても、傷があつたならば、凡て速かに醫師の診察を経て、後害の遺らぬやうに注意すべきである。

八 妊娠各月の胎兒

今妊娠の持續を二百八十日として、是が十分の一なる二十八日を一ヶ月として其各月に於ける變化を左に述べやう。

第一ヶ月



鳩卵大となる (身長三分三厘位)

第二ヶ月



鶏卵大となる。此期に於て初めて他の動物胎兒と區別つく (身長一寸二三分)

分娩時の心得

妊娠十ヶ月



胎卵は鵝卵大となり其頭は體長の三分を占め
口唇形成し齒牙生ず、指趾の爪甲分明となる
(身長三寸)

第四ヶ月



男女の區別つく(身長五寸位)

第五ヶ月



頭髮生える(身長八寸餘)

第六ヶ月



眼瞼分離し胸筋發育し子宮外に出す四肢を
動かして吸氣を營み呻吟すること暫時にて死ぬ
(身長一尺餘)

分娩時の心得

妊娠十ヶ月

第七ヶ月



此期に分娩すると聲を放つて號叫するも一二日にして死す(身長一尺二寸餘)

第八ヶ月



此期に分娩すれば大概死す(身長一尺三寸餘)

第九ヶ月



此期に分娩すれば晚く生長す(身長一尺五寸餘)

第十ヶ月



爪甲は指の尖迄延長(身長一尺六寸五分位)

分娩時の心得

九 完全無能の生兒

月満ちて生れたる完全無能の生兒は左の如くである。
重量は七百五十匁位、肩胛の幅三寸七分位、腰部の廣さ三寸三分位にて、皮膚は鮮明にして紅く、全面乾酪様皮膚を以て被はれて居る。頭髮は密生黒色にして一寸乃至一寸二三分に延び、指爪は指端に挺出し、頭骨は硬く、分娩後活潑に泣き四肢の運動を爲し、胎兒糞(かにばど)を漏らすものである。

一〇 双胎

二つの排卵機ありて、二個の卵子が受胎するか、一卵子中に二個の胎兒原基生

ずるに由るものである。而して一回の關係でも精蟲が第二卵子に達して受胎するに差支へないのである。されば一般に分娩の度數加はり、年齢の長するに従つて此種の妊婦の多きを見る。原因は遺傳性によるものが多いが、學者の研究に依ると八十八回に一度ある割合であると云つて居る。

一一 妊娠中母體各部及全身變化

(一)子宮は非常に増大して、(平常二寸三分位のもの)が妊娠末期には五倍以上即ち一尺二寸位になる。

(二)子宮の形は硝子壘のやうであるが、妊娠すると球形になる。

(三)膈も子宮と同様に増大する。

分娩時の心得

妊娠十ヶ月

(四) 外陰部は肥大弛緩し大小陰唇は浮腫状になる。

(五) 腹壁は第四ヶ月より増大する。

(六) 乳房は第二ヶ月より膨大を始む、第五ヶ月に至れば透明水様の液を分泌する。

(七) 消化器に障害を來す、即ち妊娠五ヶ月前に來ると、ゲップが出る。すつばい水が咽喉に込み上げて來る、又嘔吐等も來る。

(八) 神経系統、神経痛(齶齒とか頭痛)が來る。

一二 お産の日を知る法

平均二百八十日にて生るゝものである。

分娩の日を算出するには最終の月経の日より三ヶ月を減じ、此れに七日を加ふるのである。例へば五月二十八日終末月経の日であれば、明年の同月同日より三ヶ月を引き、夫れに七日を加ふるが故に三月四日は出産日である。

一三 妊娠及分娩起算表

受胎せる月日	分娩月日
一月一日	十月七日
同 五日	同 十一日
同 十日	同 十六日
同 十五日	同 二十一日

分娩時の心得

妊娠十ヶ月

同 二十日
 同 二十三日
 同 三十日
 二月 五日
 同 十日
 同 十五日
 同 二十日
 同 二十五日
 三月 一日
 同 五日

同 二十六日
 同 三十一日
 十一月 五日
 同 十一日
 同 十六日
 同 二十一日
 同 二十六日
 十二月 一日
 同 五日
 同 九日

分娩時の心得

同 十一日
 同 十五日
 同 二十日
 同 二十五日
 同 三十日
 四月 五日
 同 十日
 同 十五日
 同 二十日
 同 二十五日

同 十五日
 同 十九日
 同 二十四日
 同 二十九日
 一月 三日
 同 九日
 同 十四日
 同 十九日
 同 二十四日
 同 二十九日

妊娠十ヶ月

同	三十日	二月	三日
五月	五日	同	八日
同	十日	同	十三日
同	十五日	同	十八日
同	二十日	同	二十三日
同	二十五日	同	二十八日
同	三十日	三月	五日
六月	五日	同	十一日
同	十日	同	十六日
同	十五日	同	二十一日

同	二十日	同	二十六日
同	二十五日	同	三十一日
同	三十日	四月	五日
七月	五日	同	十日
同	十日	同	十五日
同	十五日	同	二十日
同	二十日	同	二十五日
同	二十五日	同	三十日
同	三十日	五月	六日
八月	五日	同	十一日

分娩時の心得

妊娠十ヶ月

同	二十日	同	二十六日
同	二十五日	同	三十一日
同	三十日	九月	五日
十二月	五日	同	十日
同	十日	同	十五日
同	二十日	同	二十五日
同	二十五日	同	三十日
同	三十日	十月	五日

妊娠中種々の心得

一 妊娠の定義

妊娠と云ふのは妊卵を包蔵せる婦人の状態を云ふのである。
 妊娠は其の月経開始期より閉止後迄の期間を總稱し、此の期間は毎月、定期的
 に卵巢より卵を排泄し、男性に會合して受胎し而して妊娠は平均二百七十乃至二
 百八十日間を持續し分娩を以て終局とする。蓋し子宮内に於ける胎兒は羊水中に
 浮游し、其の羊水は三卵膜より包蔵せられ、而して胎兒は母體子宮に、附着する
 胎盤より出づる一條の臍帶に由つて母體と連續し、母體より滋養せらるゝもので

妊娠中種々の心得

ある。

(イ) 卵膜

卵膜は三枚より成り、胎児を圍繞し、其最外層は脱落膜と稱し子宮の粘膜増殖して卵を被包せるものである。他の兩膜即ち脈絡及羊膜は、卵より形成せられたるものである。

(一) 脱落膜。脱落膜は左の三部に區別する。

卵の附着する部を床脱落膜と云ひ、卵を圍む部を翻轉脱落膜と稱し、其他子宮部を包圍する部を眞脱落膜と云ふのである。

(二) 脈絡膜。脈絡膜は脱落膜及羊膜の間に存する膜にして、脱落膜と共に第四ヶ月に於て胎盤を造るのである。

(三) 羊膜。羊膜は卵膜の最内層に存する膜を云ふのである。

(四) 胎盤。胎盤は扁圓なる海綿體にして、臨月に至れば厚さ一寸直徑約五寸とす。而して其一方は凸状を呈して、子宮に附着し、一方は臍帶に依りて胎児に連續し、胎児の分娩後に於て卵膜及臍帶と共に、後産として排泄せらる。胎盤は多數に於て前壁及壁後に附着すと雖も稀に側壁に附着する事がある。

(ロ) 臍帶。

臍帶は胎児の臍より胎盤に達する指大の索状にして、長さ平均一尺六、七寸あり、母體の血液は臍帶を通過し胎児を養ふ所の大切なるものである。

(ハ) 羊水

羊水は胎児及羊膜間に蓄積し透明帶黃綠色の液體である。其量は五合乃至七

合を普通とし、若しこの量非常に増加する時は、羊水過多症と云ふて、一種の病的である。

二 成熟胎兒及兩性に分るゝ原因

成熟胎兒とは妊娠十ヶ月の終りに於て分娩したる初生兒を指稱す。然れども其の發育状態は兩親の状態、分娩度數、胎兒男女の區別、妊娠經過中母の營養如何、胎兒の疾患、畸形等に由りて一様ではない。本邦に於ては統計に依れば、平均一尺六寸弱、體量二百八十九匁とするも、男女により同じではない。是等胎兒の兩性に分るゝ原因古來幾多の説あれども未だ確説はない。

(一) 古來卵巢及卵は既に其性を有し精虫亦同じと、又母體に密接なる關係を

有し、受胎の瞬間に定まる。

(二) 胎兒發育經過中に兩性に分るゝと云ひ、又兩親の年齢に關す、其他母體營養及妊娠時期により異なるものである。

三 子宮胎兒の位置、體向及姿勢

(一) 胎兒の位置とは、母體縱軸と兒體縱軸との關係を示すものであつて、横位縦位の二種がある。

(イ) 横位とは母體の縱軸と兒體の縱軸と互に交叉する位置を云ひ。

(ロ) 縦位とは母兒體の縱軸互に一致の方向を取るものを云ふ。

(ハ) イロの中間位を取るものは即ち斜位なり。

妊娠中種々の心得

(一)體位とは子宮内胎兒の背部が、母體の何に對向するかを示すものであつて母體の左側に兒背あれば、第一體向と稱し、右側にあれば第二體向と云ふのである。

(二)姿勢とは、胎兒の各部相互の關係を云ひ、多少相違の點がないではないが元來妊娠子宮は卵圓形なるが故に是れに適合し最小なる體位をなさざる可からず之を詳言するに胎兒は下顎を壁に接近し兩上肢は肘關節に於て屈折し、上膊を側胸壁に附け手を交叉し下肢は股關節及膝關節に於て屈し大腿を腹壁に當て、下腿を交叉す、而して軀幹を前屈するものとす。而して妊娠後半期には多くは縦位にして頭部を下方に占むるを普通(即ち正體位)とすれど前半期に於ては頭部上方にあるもの相半ばす云ふ。

四 數胎妊娠

數胎妊娠とは二胎兒以上同時に妊娠するを云ふのである。而して胎兒二個なる時は双兒、三個なる時は品胎、四個なる時は要胎と云ふのである。五個以上なるものは只記載あるのみ、双胎妊娠は一卵性二卵性の二種がある。一卵性は卵の分裂に原き兩胎兒に常に同性にして、二卵性は同性又は異性である。是れ多くは經妊婦に多い。經驗に依れば、二十乃至三十歳の年齢に多く、而して各胎兒に附着する胎盤も共通或は各固有の二種である。双胎妊娠にありては子宮過度の肥大に基く壓迫及鬱血を早期に來すが故種々の障病を惹起するを以て須らく注意す可きものである。若し双胎妊娠なる時は、腹部の觸診に依り胎兒の同名部分を二個觸知

妊娠中種々の心得

するを以て双胎妊娠なるを知るのである。

五 初妊及経妊の區別

初妊なれば腹壁硬く緊張し、末期には皮膚の深層離断するが故に、灰白色の線を生ずる。胎兒の觸知は経妊の如く容易ではない、乳房の緊満硬實し、臨月に達すれば兒頭は既に骨盤内に來り、前腔穹窿部を下方に壓出し、骨盤入口に固定す。然るに経妊に於ては、腹壁弛緩、且つ薄弱にして子宮を按ずるに、容易にして胎兒部分の觸知も又易く曾て妊娠の爲めに生じたる新舊癍痕を認め乳房懸垂し、外生殖器及子宮腔部には數個の癍痕あるを以て、初妊婦と明かに區別することを得るのである。

六 胎兒の生死を知る法

妊娠五六ヶ月以上に達し、胎兒死亡する時は、生活時の位置、胎勢變化し、子宮縮小且つ柔軟と成り胎動、心音共に停止す可し、此時に於て母體に起る徵候は妊娠月數に應じて子宮増大せず、乳房弛緩し妊婦は異様物體自己の腹中に在つて運動時に轉倒するが如き感を覺え時としては又腹内冷寒を來し、産道より惡臭のある液を洩すことあり、其他精神の亢奮を招き後に至り種々の障礙を惹起す、此の如き時は早く専門醫を招いて自己の安全を計らねばならぬ。

産褥中の心得

一 産褥六週間

産褥と云ふのは後産が下りて後六週間を云ふ、此の間に生殖器は完全に舊に復するのである。産褥中は必ず身體を安静にして、六週間の中二週間は、褥中に居るやうにせねばならぬのである。然らざれば種々身體に障碍を來すこともあるのである。

二 産褥中の悪露

産褥中には一種特異の臭氣ある液を子宮から泄らすものであつて、之を悪露と

云ふのである。これは分娩後、三四日間は血液のやうな色であるが、次第に色が淡くなつて、七八日を経過するに、白色の粘液となり、量も日々減つて凡そ十三四日で全く止んでしまふのである。産褥を離れることが、餘りに早過ぎると、一時止んだ悪露も再び血液様の液を泄らす事がある。又若し悪露に變な臭みのあつた時には産褥熱を起したのかも知れないから、速かに醫師の診断を受くべきである。

三 産褥熱の注意

産褥は最も危険である。分娩及び産褥中に消毒不十分の爲め一種の微菌が侵入して發するものである。通常産褥中には熱が發するものではない。稀に熱があ

産褥中の心得

妊娠十ヶ月

つても、一度と違ふものではないのである。若し三十八度以上も熱の出た時には産褥熱の疑ひがあるから、速かに醫師の診断を受くべきである。

四 分娩後の手當て

外陰部の不潔を消毒するには温湯を以て三十倍にしたる石炭酸水か百倍のリゾール水にガーゼを浸したるものにて拭き浄め、次で會陰部の裂傷有無を檢め、若しこれを認めたらば相當の手當てを施し、殺菌ガーゼ及び脱脂綿にて丁字帶を施す、而して次に施すべき腹帯は子宮收縮の確實なるものには軽く、双兒分娩乃至子宮收縮不全等にて後出血劇しきものには強くすることを注意し、最後には頭部を低く仰臥せしめて、安眠をなさしめ、脈搏を檢査して顔面の異狀其他の注意

を怠らないやうにすべきである。産後七日乃至十四日は靜かに仰臥して、精神の安靜を守るのである。

五 産褥中の攝生

産後少くも一週間成るべくは十日乃至十四日間は仰臥するやうにしなければならぬ。若し早や過ぎて起床する時は、子宮の大なると其の重みの爲め、其の結合の柔軟となり、弛緩なし居る等に由つて、子宮の轉位殊に子宮脱垂及び出血を來すの虞れがある。然れども餘り長く仰臥するときは、子宮後屈を發する。故に第五日位より側臥し、第二週の始めより時々起坐せしむるもよいのである。第六週後に至れば平常の業務に就くも妨げはないのである。

六 産褥中の兩便

産褥中は、たとへ兩便でも起きない様にし、褥中で便器を用ひるがよい。併し尿等も思ふやうに出ず、大便も分娩後第三日までは大抵通じないものである。若し三日に至るも通便のない時には、腹部を静かにもみ、石鹼水の灌腸又はヒマシ油三〇、〇を服用するか、又は硫苦、旃那劑等の下劑を服するのである。分量は醫師の指示に従ふべきである。

産後第一日に於て尿が出ない時は、下腹に濕性温巻法を施し、微温石炭酸水を外陰部に灌ぎ、以て利尿を促すべし。又カテーテルを用ひて排尿するのである。然しこれ等はすべて醫師の手に依つて施行して貰ふべきである。

七 産褥中の入浴

産褥中は身體の安靜を守らねばならぬのであるから、入浴が出来ない。故に毎日石鹼を用ひ温湯を以て、全身を拭ひ清めねばならぬ。四週後に至りて初めて入浴しても差支へないのである。

八 産褥中の衣服

分娩の際に發汗の爲め濕潤せる寢衣は、やわらかで暖めた清潔なるものと交換しなければならぬ。そして蒲團、敷布等も清潔にして乾燥したものをを用ひ、發汗する事があつたならば、乾燥したるタオルを以て之を拭ひ、其都度寢衣を取り換

へねばならぬ。

九 産褥中の居室

産褥中産婦の寝て居る室は夏は窓を開け放し、冬と雖も時々開けて空気の交換をしなければならぬ。そして室内の温度を適宜にして、感冒に罹らぬやうにしなければならぬ。

一〇 産褥中の腹帯

産褥中は腹部に綿を當て、フラネル又は晒布の巾の廣いので捲いて置くようにする。

一一 産褥中局部の清潔

局部は兎角不潔になり勝ちであつて、産褥中は殊に甚だしいのである。而して特に産褥中は清潔につとめねばならぬのであるから、外陰部及び其の周囲は毎日二回以上殺菌水若しくは過満俺酸加里（千倍乃至三千倍）を用ふるか、五十倍の石炭酸水、又は百倍のリゾール水で、洗滌して清潔につとめねばならぬ。そして若し創傷あれば沃度ホルム、アイロール等を散布するのである。創傷の有無に係らず、洗滌清潔した後は、殺菌せるガーゼを局部に當て、その上へ脱脂綿を重ね丁字帯を以て之を保たして置くのである。

一二 乳房の清潔

乳房は常に清潔にし、温度を保ち、哺乳の前後には清水に浸した布片を以て拭き清めるがよいのである。乳嘴の凹んで居るものは、指にて毎日引き出すやうにする。

一三 産婦と授乳

産婦は必ず自ら授乳しなければならぬ。但し結核、癲癩、精神病、熱病等に罹り居るか、或は非常に衰弱して居る場合には授乳してはならない。

一四 授乳の度数

授乳の度数は初生児の泣く毎に哺乳せしむるも可なれども、大抵三時間毎に之れを與へ、夜は六七時間休息するのである。

一五 産褥中の食物

産褥中の食物は第一日に於ては粥汁牛乳若くは肉汁を撰び、第三日以後に至り便通を得れば固形食物を攝取してよい。然れども苛烈不消化物、醗酵し易い食料は忌むのである。牛乳の外、白湯、薄き茶、珈琲等は害はないが、酒類は決して飲んではいけない。八日目位からは柔かい普通の御飯に移つてよろしい。

産褥中の心得

産児の手當と其心得

一、産児臍帯の手當

初生児の臍帯を切斷すれば攝氏三十七度以上の温湯中に入れて、初生児に附着する汚物を徐々に洗ひ、殊に眼は産婦の淋疾の有無に係はらず、一——二%の硝酸銀水を點眼し浴後は温暖にして、乾燥したるタオルを以て全身を拭ひ、臍帯の斷端は消毒綿紗を以て包み且つ上方に折り返し綿帯を以て保持するのである。而して綿帯は糞尿又は悪露の爲めに汚染せらるゝ時は、嬰兒重患に罹る虞れあるから、直に交換し且つ消毒しなければならぬ。然らざるも一日一回は充分消毒の下に交換するを通例とす。若し日を経て臍帯自然に脱落したる時は、華攝林を塗

りたる綿にて臍創を覆ひ、細菌の侵入を防ぐやうにする。

二、産児の寢せ方

産湯を使はせた上は寢かして置くのである。其の寢床は母親の床と別にした方がよろしい。そして其の暖かさは大人の衣具より一層暖かにしなければならぬ。それは今迄母親の暖かい体内にあつたものが一時に急激の變化を來したのであるから、餘程注意しなければならぬのである。それで冬は湯タンポを入れるなごし夏は別にその必要はないが、大人よりは暖かくしなければならぬのである。その布團も軟かいものを用ひて寢かさねばならぬ。

又衣服は元より温暖にするは勿論なれども、過分の重量あるものは呼吸運動を産児の手當と其心得

妊娠十ヶ月

障碍するものであるから、成る可く軽く且つ暖かいものを選択ばねばならない。

三 胎便の處置

生れて一晝夜は唯胎便又は尿を二三回するのが普通である。産児には肛門より陰部にかけて、櫻紙を當てて置く、襪襪は洗ひ晒した晒の木綿を用ひ、これには浴衣などの着古るしたのを、よく洗濯して消毒したものを着用するがよろしい。

四 嬰兒の便秘

嬰兒出産後二十四時間以内に胎便をしないものは、或は鎖肛と云つて、肛門が閉鎖されて居るかも知れないのであるから、醫者に見て貰はねばならない。

五 嬰兒の食慾

嬰兒が産後二十四時間位を経ると食慾が出て来るものである。此時に至つて母乳の分泌が始まらないならば、牛乳を飲ませるのである。若し牛乳を用ひる時には、必ず一度煮沸して、且つ沸騰水にて稀釋したものを用ふるのである。此の稀釋法は牛乳一合に對して水三合の割合によるのである。それに砂糖を少し加へガーゼにて乳呑を拵へそれで飲ませる。

六 授乳と乳房の清潔

産兒の手當と其心得
嬰兒に乳を吞ませる時には、乳の周圍を石鹼を以てよく洗ひ、それを更に硼酸水

妊娠十ヶ月

で洗つて、それから乳を飲ませるのである。若し母の乳嘴が出て居ない時には、産兒が吸ひつく事が出来ないから、母は前から乳嘴をよく引つ張つて吸ひつき易いやうに馴らして置くのである。

初産の時には、乳腺の分泌が初めて起るのであるから、外部に出ないで、大變に固くなる事がある。此の時には布片に暖かい湯を浸して、胸のあたりから、乳嘴にかけて、靜かに撫で下ろすのであるが斯くすると、段々と乳が出るやうになるのである。

嬰兒に乳を與へる場合には、嬰兒の口中を、硼酸水を浸したガーゼにて拭くやうにしないと、驚口瘡等を引き起したり、口中不潔の爲め胃腸を害する様なこゝろがある。

七 乳の検査

乳母を雇ふ場合に當り、注意しなければならぬのは精神病、神経病、結核、ト
ラホーム、癩病、脚氣、腎臓炎、傳染性皮膚病、微毒等の傳染病を注意せねばならぬ。故に雇ひ入るゝに先ちて一應醫師の診察を受け合格したるものに限り乳母として雇ふべきである。

八 乳母の年齢

乳母は年齢にも又關係を有するのであるから、成るべく實母と大差のないものでなければならぬ。産後の月數と小兒の月數との關係は大なる價值がない精神温和にして伶俐であつて乳嘴の發育よく分泌旺盛乳汁は眞白色なるがよろしい。

産兒の手當と其注意

九 嬰兒の營養

牛母、乳母は常に嬰兒の發育に注目して、乳汁を能く消化して嬰兒に營養を補給せば、嬰兒は哺乳後睡眠するか、然らざるも安靜となり、數時を経て啼泣毎に需乳し、且つ利尿善く、便通佳良にして硬度及色に異狀を認めず全身肥滿するは佳兆である。是等の希望を全うせんには生母又は乳母をして、授乳間は滋養強壯の食物を攝取せしむるを肝要とする。

一〇 嬰兒の胃腸

嬰兒の胃腸は大人とは大に異なる故、此の點に注意しないと種々の病氣を醸

す事になるのである。何となれば嬰兒の食道から胃に移る所の筋肉は至つて薄弱なる上に、その路條は眞直になつて居る。又生れたばかりの嬰兒の胃壁には、皺が多くして知覺が過敏になつて居るから、嬰兒は動もすると嘔吐し、又は胃腸を痛め易いのである。一寸抱き合が惡かつたり、身體を揺ぶつたりすると、嘔吐するのは此の故である。又その温度の冷熱度を過ぎると腸胃に激しい感じを與へる。大人ならば食道から胃に至る筋肉が強く、腸の筋肉も強いのであるから、少々不消化物でも中らないが、又少々多量であつても運動さへすればよいけれども、嬰兒はさうは行かない。之を區別しないミ、嬰兒の胃腸は大人のそれとは唯大小の差あるのみと思つて居ると大なる間違がある。

小兒の罹る傳染病の注意

一 麻疹

(イ)原因

本病は萬人殆んぎ一度は罹る病氣であつて、一度患ひたる時は再び罹ることが稀である。感染し易い年齢は二年乃至七年頃であつて、其の病毒は人より人に傳染し又は器具衣類等によつて媒介せらるゝのである。

(ロ)症状

潜伏期は約十日間である。即ち病毒に感染してから十日目位で發病し、初めは不活潑、食欲不進等あつて、發熱三十八度又は三十九度位に昇り、羞明結膜加答兒

鼻加答兒或は咽喉、氣管支の加答兒を發し、咳嗽あり、是等の症狀は前驅症狀と云ひ、二日乃至三日位持續する。此時に口腔内を検査すると粘膜に小なる中央に白點ある赤色の斑點あるを見る。之れは麻疹の前兆たるを示すものである。次で發疹期となり、急に熱は三十九度五分或は四十度五分位に昇り、初めて麻疹の特徴たる發疹を生ずる。發疹は顔面に始まり頸部、胸、腹部に及び、普通多くは二十四時間内に全身に發疹する。然して疹との間は多少紅色となるも、必ず尙一小部分に健全なる皮膚を存在するものである。咽喉粘膜にも發疹するを以て、往々犬吠様咳嗽があることがある。かくて三日乃至四日に熱下り、患兒は安靜となり、皮疹は漸々消えて、其の痕跡を残し、之れより上皮の落屑が始まり、多くは發病後二週日乃至三週日位にして全治するものである。本病は多くは喉頭及氣

小兒の罹る傳染病の注意

腎支加答兒の合併症あるを以て、全経過中、咳嗽を發するものである。尙發疹後四日以上にして下熱せざる時は、重き合併症ある爲めである。殊に加答兒性肺炎或は中耳炎等は本病に併發し易くて、往々死亡の原因となることがある。

(ハ)療法

一 家族内に滿一年以下の小兒あれば成るべく隔離するをよしとす。何となれば斯くの如き幼兒は、往々重症に陥り、殊に合併症を發し易いからである。之れに反して三年以上の小兒にして未だ麻疹に罹らないものは、寧ろ善性の麻疹流行時に罹らせるがよい位である。

患者は清潔なる室内に靜臥せしめ、空氣の流通に(副室より)注意し、牛乳、粥、汁等の流動食を與へ、固形物は禁じなければならぬ。藥物は清涼劑、祛痰劑にし

て患兒の外出は凡て四週日内外の後である。尙合併症あれば、其の治療をなすこと勿論である。眼は五十倍硼酸水にて清潔に拭はねばならぬ。

二 風疹(かさほろ)

本病は三年乃至十年の小兒に發する、傳染性發疹病にして症状は軽く全身症状を起すことなく、僅かに輕熱を發し、發熱と殆んど同時に、顔面及其他の全身に發疹する。

経過は三日乃至四日にして全治す。別に治療を要することなく、清涼劑にても與へればよろしい。

三 水痘

本病も亦小兒にのみ發する傳染性發疹病にして、凡そ二週間位の潜伏期を経て

小兒の罹る傳染病の注意

輕熱を發し、急に全身の處々に粟粒大の紅斑を生じ、次で水疱となる。此の小疱は二日乃至三日目位に自然に萎縮するが、或は破れて暗色となり、多くは一週日位にして痕を残さず全治するものである。熱は二日位にして降るものであるが、稀に三十九度位の熱を發し水疱疹も亦全身一面に發生することがある。別に治療を要しない。四五日静臥せしめ、入浴は全く治癒の後に行はねばならぬ。熱あれば清涼劑を與へ、咳嗽あれば祛痰劑を内服せしむ。

四 猩紅熱

(イ)原因

本病は傳染力劇烈にして其の病毒は數週或は數月間其傳染力を失はず、其の傳染は人より人に行はれ、人、衣服、器物、食物等により、媒介せらる、秋より冬に流行し、三年乃至六年位の時に最も多い。其の病毒の侵入門は咽喉粘膜なるが如く、其他損傷せる皮膚よりも病毒侵入する。

(ロ)症状

潜伏期は三―五日にして初め不活潑、食欲減少、睡眠不安、頭痛嘔吐、咽頭痛、發熱等の症状を發し、一日乃至三日にして卒然熱は四十度或は四十一度に昇り、初めは頸部、胸部に鮮紅色を呈し、順次全身一面に鮮紅色の發疹を生ずるのである。之れと同時に咽頭に炎症を起し、腫脹疼痛ありて、汚き白色の苔を生じ舌も亦乳頭の隆起を來す。かくして此の症状は七日乃至八日持續し熱は下り、平温に復し、皮膚の紅色は消ぬ咽頭の苦痛も去り、之れと同時に表皮の落屑を始め、健康状態になる迄には長日月を要することがある。本病は幼兒、或は重き合併症

小兒の罹る傳染病の注意

妊娠十ヶ月

を生ずるときは危険である。

(ハ)療法

患児は必ず隔離すべし、病室及び患者に接したる室内、器物等は完全に消毒を行ふのである。患者は清潔にして、空気の流通よき室内に静臥せしめ、牛乳、粥汁等の流動物を與へ、熱の爲めに口渴あるを以て、鹽酸リモナーデを内服させ、口腔及咽頭は次の含嗽藥にて、毎三時位によく含嗽せしむるのである。

例之ば一%硼酸水又は一%重曹水

- 一、鹽酸カリウム 四、〇
- 薄荷水 五、〇
- 水 二〇〇、〇

右含嗽料

五 實扶的里亞

(イ)原因

實扶的里亞は、恐るべき急性傳染病にして、其の細菌はレフレル氏の發見せしレフレル氏菌と云ふ、桿菌である。此の細菌は病室内、衣服、器具に附着して、長日月の間生存し、尙ほ感染力を失はない。殊に乾燥したる細菌は、極めて長く生存し、數月間、尙其力を失はない。然れども攝氏五十度の熱、或は二十倍石炭酸水、千倍昇汞水及日光には弱くして、死滅し易いものである。病毒の傳染は、病者より直接に或は衣類、器具等の媒介により、人體には何れの部にも感染し得るものである。殊に最も多く胃さるゝは咽喉部にして、昔時は咽喉實扶的里亞を馬

小兒の罹る傳染病の注意

脾風を稱し、血清療法の見なき以前は、人皆死病として恐れしものである。咽喉の實扶的里亞は、二年乃至五年位の小兒に多く十年以後に少い冬より春にかけて最も多く流行す。一回本病に罹れば終生免疫せられ、再び傳染することは至つて稀である。

(口) 症 状

本病は咽頭に發すれば、咽頭實扶的里亞と云ひ、喉頭、氣管に發すれば、實扶的里亞性格魯布と稱し、經過に長短あるも、多くは甲より乙に移行し、或は乙より甲に移行す、以下咽頭實扶的里亞の概略を説く。

患兒は感染してより、二日乃至七日の潜伏期を経て、皮膚蒼白色、食慾不振等の不定症狀を發し、或は往々此時既に飲食に際し、咽喉の疼痛を訴ふることがあ

り、次で發熱し、體温は多く三十八九度に昇り、咽喉の疼痛を發す。是に於て咽頭を見れば、咽頭部は一般に充血し、扁桃腺は、一個或は左右共に腫れ、多くは腫れたる扁桃腺の上、稀に咽頭の後側部に灰白色の義膜あり、此の時期に血清注射を施せば、直に輕快するも、然らざれば義膜は速に咽腔全面、更に進んで鼻腔或は喉頭に蔓延し、熱は上昇し、疼痛劇烈となり、患兒は嚥下に困難し、或は全く飲食せず、其の喉頭に蔓延せし場合は、音聲は嘎嘶て遂には失聲し、咳嗽は犬の吠ゆる如き、一種特異のものとなり、呼吸殊に吸氣は延長して、喘喝を發す。喘喝は其の音高くして、屋外に迄も聞ゆ。是等の症狀は格魯布の徴候である。尙次に喉頭格魯布に就て略説しやう。

喉頭實扶的里亞即ち格魯布を起す場合は、多く咽頭の實扶的里亞に續發するも

小兒の罹る傳染病の注意

のであるが、之れに反して咽頭に何等變化なく、或は僅かに充血するに過ぎずして初めより喉頭に實扶的里亞を發することがある。此の場合には患兒は病毒が感染してより、潜伏期を経て輕熱、不快咳嗽等の症狀が二三日持續せし後、或は何等の變化も熱もなく、卒然格魯布症狀を發す。患者は音聲の嘎嘶、犬吠様咳嗽、呼吸殊に吸氣の延長、喘喝等を來し、更に進んで全く失聲し、言語もなし得ず、苦悶の狀態に陥り、時々窒息狀を呈し、患兒は手を以て、喉頭の障害物を除かんとするの狀をなし、頭部に冷汗を流し、口唇は紫色となり、かくの如き場合に至りても、尙治療を怠るときは、中毒症狀増進し、患兒も衰弱し遂に窒息、或は心臟麻痺によりて死亡するのである。又格魯布は氣管にも蔓延し、或は初め氣管に原發して、喉頭に蔓延するものである。熱は全經過中全く無熱のものが少くない

次に實扶的里亞に併發し易き、最も重なるものは、加答兒性肺炎、心臟麻痺、腎臟炎及實扶的里亞性麻痺等にして、肺炎を併發せし場合全治困難のこと少くない。又心臟麻痺は中毒の結果にして、卒然來ることがある。

(ハ)療法

豫防法としては患兒を隔離し、健康兒を接せしめぬやうにする。患者の病室衣類器具は完全に消毒しなければならぬ。

患兒に對しては、一刻も早く血清注射を行ふ。血清は初めより傳染病研究所の第三號を一回に注射するをよしとす。一回にして効なくば第二回の注射を要す。

二回目は普通二十四時間としてあるも、十時間位にてよろしい。血清注射をなしても、輕快の模様なく、窒息の虞れあるときは、手術即ち

小兒の罹る傳染病の注意

氣管切開術を行ひ、器械を氣管に入れ之れにて呼吸せしむ。

本病は總て醫師の治療を專一とするのである。

六 疫 痢

(イ) 原因

本病は二年乃至六年の小兒に最も多く、夏季に流行する。誘因としては不消化物の攝取殊に漬物類、果物或は菓子類の過食により或は氷水の飲用又は就眠前の飲食及寢冷、腐敗の食物を食する等である。微菌は多く大腸菌なるも或は赤痢菌があることがある。而して大腸菌は平常健康人の腸内にあつては無害の微菌であるが是等の誘菌により猛烈なる毒性を起し、或は既に毒性を起したる大腸菌

が傳染により腸内に侵入し恐るべき中毒症狀を發するにある。

(ロ) 症 狀

本病は實に恐るべき急劇の疾患にして、患兒は突然不快を催し發熱三十九度或は四十度五分に昇り、初め不消化物及粘液様の惡臭ある稍黒色の軟便を排泄し、二三時間の後に大便是綠色の臭氣ある粘液便或は單純の粘液便となりて下痢する又少量の血液の混ざることがある。此時に於て患者は中毒症狀を起し痙攣を發し精神恍惚となり、次で昏睡に陥り脈搏は頻數となり、弱く殆んど手に觸れず、かくして十二時間乃至二十四時間内に多く心臟麻痺を起して死亡す。下痢は死に至る迄に多くは二三回乃至五六回なるも、稀に十回位あることがある。

(ハ) 療 法

小兒の罹る傳染病の注意

夏期は小児の飲食物に注意し誘惑となるべき不衛生をなさしむべからず、殊に飲用水に注意すべし。本病を發せば、直ちに隔離し以て傳染を防がねばならぬ。治療は一刻も早く醫師に診断を乞ふて、其の治療を受くるのである。

七 小兒赤痢

大人に發する赤痢は小兒にも發し、原因症狀總て同一であるが、小兒は一種特有の急劇の症狀を發し、死亡する赤痢あるを以て、其の概略を述べやう。原因は赤痢菌にして、二年乃至五年位の小兒に多く、夏期に流行し、其の誘惑因は疫痢の時と同一である。症狀は、本病も亦實に急劇にして卒然、不快、高熱、痙攣、下痢を起し、人事不省に陥る、而して本病の下痢は疫痢と異り、非常に劇然にして

初めより水分多く粘液、血液を混じ、一時間十回乃至二十回に及び、患者は脱力し、早きは一晝夜或は二日位にして、心臟麻痺を起し死亡することが多いのである。幸にして此の危険時を経過して治療に向ふときは、下痢は粘液血便となり、或は膿を混じ腐肉様となり、便通時腹痛あり、全く赤痢特有の症狀となり、二週乃至三週日位にして全治するのである。療法は患兒は隔離し、消毒を完全にす、薬餌は總て醫師の指示に従ふのである。

八百日咳

(1) 原因

本病は流行性に來たること多く、年齢一―三年に最も多し一度是れに罹れば再

小兒の罹る傳染病の注意

妊娠十ヶ月

び罹ることは少い。寒冷期に多い。本病に細菌を發見せし人あれども、未だ明かでない。

(口) 症状

初めを加答兒期と稱し、鼻、咽喉、喉頭、氣管等の急性加答兒の症状にして元氣は衰へ、食欲進まず、咳嗽を發す。且多少の發熱を見ることがある。かくて一週乃至二週日を過る間に、元氣、食欲等は稍恢復するも、咳嗽は止まず益々甚しくなり痙攣期に移り、特異の咳嗽を發するに至る。此時に於ては一般状態良好にして、咳嗽の數減少することあるも發作性となり、一定の時ありて起り、殊に夜間に多し、又咳嗽發作は何の誘因もなく發することあるも、笑怒、啼泣、吃逆嘔下運動等により起し易い。患者は發作に先ち突然不安恐怖の狀をなし、現にな

しつゝありし食事、遊戯等は止め、將に來らんとする。咳嗽發作に備へをなすことが多し。發作の状態は呼氣多く、吸氣少き、連發する咳嗽運動にして、吸氣は長く笛聲を發し、顔面は赤くなり、流涙を來す、此の發作の終りに嘔吐を發して止むこと少なからず、又發作の持續する時間は、多くは二三分にして、其の回數は二十四時間内に五六回のことがある。重きは六十回に及ぶことがある。然して痙攣期は四週乃至六週日を経て、漸々咳嗽の度數、強度減退して、輕快期に移り、咳嗽は益々輕くなり、二週或は三週を経て全治す。本病の全經過は、多く八週乃至十週なるも、三四ヶ月の久しきに及ぶことがある。併發し易き疾病は毛細氣管炎及加答兒性肺炎等である。

患兒は成るべく清潔なる空氣中にある住居に生活せしめ、其居室は光線の射入

小兒の罹る傳染病の注意

及空氣の流通に注意し、風なき晴天の日は屋外の運動をなさしめ、營養品は牛乳粥、卵黄等を回数及時間を定めて與へ、決して乾燥せるもの、或は香氣あるものは與へてはならぬ。藥物は總て醫師の指圖に依るべきである。

生殖衛生

一 青年色慾の害を戒む

獨立の生活を營み、一家を支持して妻子を養ふものは成人と云ひ、未だ此の能力を實現し能はざるものを青年と云ふのである。

乃ち青年時代は、此れより長じて祖先の遺業を辱めざると、新たに一家を起して、社會に地位を得るとの別なく、前途には、洋々たる希望と幸福と欲望と

に輝き満てるものにて、此天地にありて應用すべき學術、技能、才幹を圓滿に享受する修養の時である云はねばならぬ。

古諺に「人少き時、血氣未だ定まらず、之を戒むる事色にあり」と云ふことがある。實に是れ千載の至言である。而して前途裕なる光明を望みつゝ、修養の爲めには日も維れ足らざるの時、敢て色慾の奴となるが如きは、悲しむべきことである。此の色界の盲鬼、實に夥しく、可惜體力と精神とを消耗し、甚だしきは産を傾け身を破りて、世の嗤笑を招き、災禍を子孫に遺して、社會の指彈を受ける者、擧げて數ふべからざる程である。

然らば男女青年諸君の最も戒むべき色慾とは何であるかと言はんには、男女間に發する自然の性的愛情にして、互に相接觸するに由りて、情熱の最高程に到り

意識朦朧として理解する力も欠け、非倫の醜行を敢てして悔いず、青年男女の墮落と謂はるゝに至るのである。

色慾は相接觸するを欲するものにして、之れに介達的接觸、直達的接觸の二種がある。即ち介達的接觸に始まりて、直達的接觸に至るものであつて、其の介達的に起るものには、視覚より來るを最も多しとす。例へば美裝したる一婦人を見たる者、其花顔、錦衣の彩光陸離として、眼球に入り、眼底網膜に映じ、忽ち腦中樞の視神經を動かして、容姿の美を感じ愛慕の情を起すに至るのである。次は嗅覺より來るものにして「スミレ」「バラ」等の香水、或は麝香の如き馥郁たる香氣、又は女子の體邊より發散する特有の臭氣を嗅覺して愛情の發動となり。又聽覺より入り來るものは婦女の柔靱なる聲帯を出で、玉を轉ばすが如くに響く

音聲の、一度男子の鼓膜に感じて内耳に共鳴し、腦中樞に及べば、湧然として執慕の情に堪へざらしむ。此の目に見るべからざる嬌音は、而かも腦裡に印象を留むること甚だ深く、有力なる接觸の介達をなすものである。又直達的接觸は口舌の味感の如き、互に肌膚の相觸るゝが如きにして、是れ色慾の目的の終りである。

要之に、性慾的愛情なるものは、男女漸く相近接するに従ひて情熱を増加し常に其の極致を想像して、是れに達せんと焦慮し、遂に情火燃え盛りて全く身を爛らすに至る。今其の關係を圖にて示せば左の如くである。

女性を中心として、此の周圍線の最も太きを第一線とし、既に色慾の色の爲め盲目となりし餓鬼にして、常に女性を想起するより他に意識なく、相接觸するを

以て、無上唯一の樂事となす。漸次周圍の細き程危険界に遠く、第四線を以て殆ど情火の灼熱相達せるものとし、全く色慾を念頭に置かざる領域である。而して



尙ほ圓周線の細太は、中心女性の作用する引力の強弱を示す。即ち(イ)の如きは、異性の臭氣、香料等の介達に依り、微かに色慾の念を萌したりと雖も、幸に引力作用薄弱にして能く自己の境遇を反省し得たるも、(ロ)に至りては引力の作用するこ強く、反省の念も執着の念とは互に争ふて煩悶すと雖も、心神疲癒して理解力乏しく、却つて自ら進んで女

性の歡心を得んことを努むるに至り、(ハ)は己に女性の奴隸となり、稜々たる硬骨、忽ち軟化し來り、女子の一顰一笑を窺ふことのみ知りて、全く自己を没却し時に引力の羈絆を解脱せんを欲することありとも、此の強力又如何ともすること出来ぬ。情火に焚き盡されたる殘骸は、遂に墮落壞滅に歸す。經書に「男女七歳にして不同席」と、此の如きは今日にあつては、嚴格に過ぐるの嫌ありと雖も、然も其の精神に至りては、實に尊重して服膺せざるべからざるものである。かの正月の歌留多遊びの如き、青春の男女席を同うして雌雄を争ふに、肩々相摩し、手掌相觸れ、更闌け室内熱し來れば、勝負の數既に去り、視るもの聴くもの、只に脂粉の香、錦裳の光澤、鶯にも似たらん嬌聲、逆上したる櫻花の肌、刺戟は重なり、接觸相次ぐ、不知不識の間に情火熱し來りて、忘想起り襲はん

こと亦避くべからざることである。其他今日の青年男女交際の結果は、世上多く之に基因して、一身を過るに至りしもの多しと傳ふ。其一利に百害を伴ふもの、認むるに難くはないのである。即ち青年男女の接近は、危険の相接近するものに似たること、既に説いた通りである。豈慎まねばならぬことである。「君子は危きに近よらず」と宜なり云ふべしである。

上述の如くんば、諸君或は曰はん、色とは絶對に且つ永久に忌避すべき、人生の害敵なるか、と。色慾も禮に則り、時を得、處を得て以て茲に接觸するにありては、實に人生緊要の原動力なるのである。常に心神快活に、活動して倦まず希望輝き、名利共に揚る。之れ即ち神聖なる男女の愛の賜物である。

人一定の年齢に達し、獨立自營して一家を立て、妻子を養ひ能ふべくんば、茲

に良媒を得て大禮を擧げ、男女初めて夫婦の契りを結ぶや、心氣更に新にして、四季常に春風漲り、山河草木皆我が爲めに謳歌するが如く、艱難に耐へ、困苦に克ち志愈々振ひ、家を興し、業成りて、祖先を昭にし、子女繁榮して血統永續し、親子兄弟を創始して以て人倫の基を爲す。此れ皆色慾の偉力である。天亦此の眞意を以て、色慾を吾人に賦與したのである。

諸君は思を此處に致せ。不潔の色慾を厭ふものは、却つて後に神聖なる愛に接觸し得て、人生の眞意義を解するものである。彼の蟬を見よ、夏日炎熱を縁陰の清風に避け、讚美歌を奏して、雌雄相求め男女相愛の慾を遂ぐれば、兒孫の永續を成し露に厭ひて死す。是れ曩に土中に於て「ケ、ンボ」と呼ぶ三年間の苦役を経、始めて雌雄の愛に接觸するを得たものである。然るに彼の夙く情慾に耽溺し

て、悖倫的の情交を持続する間、恐るべき花柳病の侵襲を受け、精神墮落し、體力消耗して又救ふべからざるに至り、青春の華花忽ち萎え、誰か再び之を顧る孤影風寒うして、徒に残骸を照し悔ゆるも返らざる悲境に沈淪するは、正に是れ蟬の苦行に比すべき、十年乃至十二年の修養を忽諸に付したるの罪ではないか。神聖なる男女接觸し得るの資格は即ち蟬の苦役を脱して後、緞の羽衣を着け、涼風に甘露を得るが如し、然かも吾人は常に人倫の大義を重んぜざるべからず、時之所を度ざる不潔の色慾は、大義を汚濁し、風習を亂して、忍び能はざる不快の事が尠くない。之れ單に一身一己の不利なるのみならず、社會を害すること亦甚だしいのである。

人は社會と何等の交渉もなく、孤獨以て生存し得るものではない、等しく天地

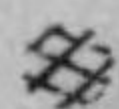
覆載の恩、君父の恩、師友の恩、衆生の恩に倚りて、今日を安全に送ることを得るものであるから、四恩の大なることを深く思はねばならぬ。我れ一人の力にて能く生けりと思ふ者あらば、之れ大なる誤りである。故に一身一己の禍は顧すゝするも、累を延いて之れを社會の同人に及ぼすこと、決して許すべからざる事である。極端なる個人主義者の如く、我れ善を爲すも、惡を爲すも只我が自由なり、爲めに我れ自ら害を蒙るとも、他人の與り知る所にあらずとなす、實に此れ四大恩の理義を解し能はざるの痴漢である。

人倫の大義は須臾も離る可からざるの道である。色慾は動もすれば青年を誘惑して此の常道を逸せしめんとす。豈戒めねばならぬ。諸君は必ず此の如き不靈なる個人主義に誘惑せらるゝこと勿れ。

二 男子亂淫の害

吾人の腦及び神經を興奮し、強壯ならしむる營養分にして、重要なるは、蛋白質「スヘルミン」、磷酸鹽類等である。精液中には此等の重要成分を多量に含有するを以て、今若し房事を亂行して多量の精液を失はば、此等の諸成分は體外に排泄せられ、腦及び神經は其の健康を保つこと能はざるに至るべく、且つ之れを補給せんが爲めには貴重なる血液を多量に消費せねばならぬ。實に一滴の精液を製出するには四十滴の血液を要すと云ふ。如此身體の營養分を消費し、精神を消耗すること多く、又身體を勞すること甚だしきを以て必ず身神を疲憊せしむる結果となり、身體組織の物質も障害を蒙り、著しく健康を損ひ、全身、腦及び神經

を非常に弱せしめて憂鬱症を起し、時としては反射的に興奮して過敏となり、恰も精神病者の如くなり、記憶力減少し、理解力缺乏し、心悸亢進して呼吸窘迫となり、消化不良、顔面蒼白常に頭痛を覺ゆ、而かも發育旺盛なるべき少年、青年時代に於て此の害を受くること一層甚だしく、心身の發達を妨ぐるは勿論である。



過淫より來る病狀を列記すれば

憂鬱症、低能症、色情狂、心臟病、消化器病、視力障碍（近視、夜盲）腦脊髄神經衰弱症、攝護腺肥大症、全身衰弱症、遺尿症、脊髄炎、脊髄癆、腦脊髄散在性硬化、進行性麻痺、生殖機能障碍（陰萎、遺精、早漏、快ヲ減少、陰莖發育不全）

生殖衛生

若し亂行中受胎妊娠せしむる如きことあれば、其の兒は薄志弱行にして用を爲さず。或は畸形兒を生み、又は白痴となる。實に其の害毒の及ぶところ己れ一身のみに止まらずして、子孫を害し、延いては國家を毒するに至る、過淫の害甚だ怖るべしである。

三 女子亂淫の害

女子過淫の害も亦男子に於けると同じく、種々の恐るべき障碍を招來するものである。唯相異なる點は、男子精液を亂費するに對して、諸腺の分泌量が増加するのみにて、男子の養分消耗に比すべからざれども、房事勞力に伴ふ物質の消費與舊刺戟に依る精力消耗の害は實に大なるものである。殊に月經間と妊娠中とに

之れを行はゞ、恐るべき大害あるものとす。月經間に於ては、著しき循環障碍となり。妊娠中に於ては、流産、早産となり、産辱時に之れを行はゞ充血及炎症を起すのである。而して過淫なるものは、時期を論ぜず、禁忌を問はず、情慾の起るに任せて、恰も渴して水を選ばず、餓えて食を選ばざる如く、少しも省る所無く、頻々敢行して飽かず、到底其害を避け得べきものではないのである。色慾を抑制すること能はざるものに陰門、膻、子宮、卵巢等の炎症を惹き起すこと多く、腦、神經、消化器、血行器等を障碍するは、男子に劣らないのである。一時の情火に焚かれて、其身を碍するが如き愚をなすは最も慎むべきことである。

四 色情早期發動の原因

年少にして早くも色情の發動するものあり、自瀆は此等の者の、好んで爲す所である、今早期發動の原因も見るべきものを擧ぐれば、

- 一、包莖、蟻蝨、陰部の不潔、便秘、癩癧、膾加答兒等の疾病あるもの、
 - 二、神經衰弱症、癲癩、腦神經系の遺傳素因あるもの、
 - 三、淫靡なる小説、卑猥なる談話、犬其他のものに依つて見聞する者、
 - 四、學校朋友、同輩間にて相倣ふもの、
 - 五、飲食物、衣服、攀樹、石鹼等の刺激、
- 是等の爲めに、偶然快感を覺え、若しくは交接の想像を起すに因りて、之を爲す等がある、

五 男女自瀆の害

男子に於ては自瀆に依りて來る疾病の主なるものを擧ぐれば左の如くである、

- 一、全身衰弱して貧血し、顔色蒼白、過敏症となる。
- 二、生殖器障を起し、陰痿、遺精、早漏、陰莖の痿小及び彎曲、辜丸の組織變化を起し、遂には生殖作用根滅す。
- 三、頭痛、眩暈、精神憂鬱を來す。
- 四、腦脊髓神經衰弱症を起す。
- 五、脊髓の諸病、肺病、精神病、發狂、痴狂、妄想狂、腦出血等を起す。
- 六、消化器病(胃病)

- 七、聴力衰弱及び視力衰弱(近視、弱視)を來す。
 - 八、發育中の少年なれば、全身の變形異狀、全身發育不全となる。
 - 九、膀胱炎、攝護腺炎、精囊炎、睪丸炎となる。
 - 一〇、衰弱して無氣力となり操作の不快、不能、畏怖の舉動、放心錯亂等を起す、是等は最も多し。
 - 一一、手淫は其の動作の爲めに心臟肥大になり、機能緩衰す、手淫心臟と云ふものである。
- 女子の手淫より來る主なる疾病は。
- 一、子宮病、陰門炎、卵巢炎、膾加答兒、膾痙攣、月經異狀、其他の生殖器機能障礙(快感減少、情慾缺乏症)

二、腦神經の衰弱。

- 三、「ヒステリー」、憂鬱症、嫉妬、猜疑、神經過敏症。
- 四、全身衰弱、貧血、顔面蒼白、體力消耗。
- 五、消化障礙。
- 六、視力聴力の障礙。
- 七、精神病。

婦人病の注意

一 婦人病ミは何カ

婦人病は婦人にばかりある病氣であつて、主として婦人生殖器、即ち子宮及び

婦人病の注意

子宮に附屬したる臓器の病氣である、言ふ迄もなく、子宮は婦人に取つて非常に大切な機關であつて、これさへ強壯であれば、身心も健全に且つ強壯であると言ふことが出来るのである、それであるから、婦人は此の機關を保護する事には非常の注意を拂はねばならぬのである、處が近來は婦人病が非常に多くなつて來たのであつて、婦人にして子宮の悪くない者はないと言つてもよい位である、此の如く子宮病が多くなつたのは何に原因して居るのであるかと考へて見るに、それは社會が複雑になつて來たのと、生活難の爲めに、大切な婦人の機關を弱らしむる事にもなるのである、若し子宮に少しでも故障があつたならば、速かに醫師の診察を受けて治療を爲し、婦人の天職を全うするやうにすべきである。
婦人病即ち子宮病と云つても、種々の病氣があるのである、今左に其の重なる

病氣に就いて症狀其他を述べやうと思ふ。

二 陰唇及び陰核の異常

陰唇及び陰核の肥大は、先天性に來るものもあるが、多くは後天に象皮病より來るものであつて、其の肥大が甚だしければ、交接の障礙を來すのである、而して先天性なるは肥大に兼て兩陰唇の癒着を存し、又脂肪腫、纖維腫、粉瘤等に腫瘍を生じても關係は妨げらるべく、バルトリン氏腺炎、下疳等も疼痛によつて關係不能たるべく、此等は手術若しくは其他の適當な療法を施して速に治癒せしめねばならぬ。

妊娠十ヶ月

三 處女膜の異常

元來春機發動期に達すれば多くは破綻するものであるが、往々肥厚を存するこ
とがある。如此場合には及ぶだけ早期に手術を受けねばならぬ。此の容易なる
手術を怠つた爲め妊娠を障碍するが如きは、寧ろ愚の極である。

四 腔の異状

腔全部閉鎖、腔外口閉鎖、深部膜閉鎖等先天性と後天性(疾病)とあるが、何れ
も妊娠を障碍するものなれば早期に手術するがよろしい。

五 子宮の矮小

多くは發育不全にして、全身及び外陰部は普通に發育して居りながら、子宮の
み發育せぬものと、又た全身の發育不全に伴ふものと、尙ほ他に産前産後の障碍
によるものとあれども、第一の者は月經の來潮遅く、其の來るや下腹部、腰部兩
脚等に痛みを覚え、且つ頭痛、眩暈、食慾不振等起し、經血少く且つ不順にて
第二者は妊娠前に比して、前者の如き差異を見る。而して矮小の高度なるものは
絶対に不妊なるも、輕度のもの往々妊娠するも流産することが多い。

六 子宮口の狭小

婦人病の注意

妊娠十ヶ月

先天性なること、潰瘍後の癒痕收縮によること、産後來ること、其の原因は種々なるも、本病に罹れば、精蟲の子宮に進入するを妨ぐるため妊娠を害するのである。速かに醫療を受くべきである。

七 輸卵管の異常

生れながら兩側とも缺損するか、狹隘なるか、短小なるかにて、卵巢に達せぬものは絶対に不妊であるが、腫物、疾患等にて卵の通路の阻害されたものは、醫療を施せば救済することが出来るのである。又輸卵管は一側さへ健全なれば妊娠することを得るものである。

八 卵巢の異常

卵巢は兩側とも先天性に缺損せるは、極めて稀であつて、到底救済の途無けれども、一側健全なれば妊娠するもの多し。又た疾病によるものは速かに醫療を加ふべきである。

九 陰門搔痒症

陰門灼熱腫起して、濕潤且つ糜爛す。原因は糖尿病、貧血、妊娠、手淫、肥満病、いんきん等である。

一〇 陰門炎

婦人病の注意

陰唇に發疹して、粘膜腫起し、潮紅痒痒痛を覺え、バルトリン氏腺の腫大或は膿潰及び粘液、膿汁の排泄等である。原因は陰部の不潔、膿漏、子宮加答兒、尿道瘻、直腸瘻、外傷、手淫、房事過度、淋毒、腺病、密尿病、尿崩症等である。

一一 白帶下(膿漏、膿加答兒)

腔粘膜の炎症、充血、白色又は黄色の粘膜若くは膿性の液體流出等にて局所の疼痛、灼熱、尿意頻發、全身の倦怠腰痛を訴へ、食欲も缺損等の障碍を來すのである。原因は不潔、腺病、萎黄病、房事過度等であつて、就中淋毒に因るもの最も多いのである。

一二 婦人尿道炎及び狹窄

主として淋毒に基くのであるが、これは別に述べてあるから、ここには其他のものに就て述べやう。

癌腫等に於ては陰門より膿の流れ込みて發炎するこゝがある。又は外傷、殊にカテーテル挿入に際し尿道粘膜に裂傷を生ず、殊に尿道充血の爲めに弛緩する時に然り、是れ殊に産褥婦に於て甚だ多く見る所にして、排尿の際激痛を覺ゆと同時に尿意頻數を伴ふのである。故に産褥婦には、細きカテーテルを用ふべきものである。

一三 婦人膀胱加答兒

男子の膀胱加答兒ミ女子の夫れとは趣を異にす。婦人は男子より膀胱加答兒に婦人病の注意

罹り易いのである。殊に結婚後直ちに起すもの非常に多く、結婚の翌日又は翌々日に來る。又た反對に老人にも多く又た産婦にも來るのである。手術後殊に大手術後に來る。動もすれば子宮内膜搔抓後(手術)にも來る。會陰整形手術後にも來る。何故に結婚後直ちに之れを起すかと云ふに、元來婦人の尿道には常に細菌が在つて、就中葡萄狀球菌が最も多い、次に連鎖球菌及び大腸菌である。此等の細菌が或る機會に中の方に入る爲めと、又一面には刺戟を加へ充血するからである。老人に多き理由は尿道括約筋が弛んで働かないので、尿道にある細菌が膀胱に入り易きを以てなり。

産褥に起る原因は産後には總て、腹の中の壓力急激に變ずる爲め、總ての平滑筋の働きが鈍り、同時に膀胱括約筋の働きが鈍くなり、加之兒が生れ出づる時

尿道が押され多少麻痺を起し、其上膀胱に尿が長く停滞し従つて尿が分解してアルカリ性に變じ其結果細菌は容易に繁殖して膀胱加答兒を起し易くなる、殊に産褥中は臥して居る爲め、小便の通じ悪しくなり、従つて尿が溜る、溜るから分解する、分解するから、細菌の繁殖には益々良好なるものである。手術後殊に癌摘出後に起す。これは膀胱の方に行く血管を結紮し、又は切断するにより、膀胱壁の營養を害し抵抗力弱くなり、加ふるに寢て居る爲め、小便の通じが悪いから溜り、溜るから細菌の繁殖に良好となるのである。

一四 子宮外膜炎

腐敗性子宮外膜炎は惡寒、高熱、嘔吐、下腹劇痛等を發し、滲出物吸收せらる

婦人病の注意

れば諸症減退、渗出物化膿すれば體溫更らに上昇、自潰して膿を漏らし、或は自からにして死することがある。而して吸収の遅緩なるものは便秘排尿管困難を來たし、淋毒性子宮外膜炎は慢性で便通、交接、月經、等に増進する下腹疼痛である。原因は子宮實質炎の波及或は膿菌の傳染又は淋菌の侵入等に來るのである。

一五 子宮内膜炎

子宮内膜炎は粘膜炎の増殖盛の爲め起すもの及び微菌の外部より侵入して内膜炎を起すものこの二種がある。

微菌にて一番多きは淋毒菌である。元來子宮腔には微菌は居らざるも、膣には種々の微菌があつて、夫れにより起ることもある。又た産褥の時は産褥性内膜炎

を起すことがある。

又、周圍（輸卵管、卵巢）に炎症有りて、夫が波及して、子宮内膜炎を起すことがある。吾人の通例見るのは、頸管加答兒が有つて内膜炎を起すものが多い、尤も頸管加答兒のみにて、内膜炎の無い場合は無論あるのである。

急性は悪寒、發熱に初まり、下腹部壓重緊滿牽引痛、又は腰痛を感じ、帶下多くなり、慢性は月經持長を來す、其他頭痛、食慾減退、消化不良、神經性胃痛を象ね或は精神憂鬱、ヒステリーを併發すること等がある。

一六 子宮炎

子宮は増大し急性には悪寒、發熱、下腹部並びに、薦骨部牽引様、讒語、困

婦人病の注意